

Culture,
Energy
& Life

vol. **135**

September 2024

CEL



特集

場づくりのその先へ
— つながりから社会を変えていく



近年、まちづくりにおいて「場づくり」が注目されています。その試みは、時に単なる居心地のよい空間づくりにとどまることもありますが、集まる人たちがつながりを築き、それぞれの能力やバックグラウンドを活かして新しい取り組みを始めるようになる。さらに、そこから生まれたプロジェクトが、社会の制度や仕組みを変えていく力を持つようになる。そうした豊かな場をデザインしていく必要があるのではないのでしょうか？

今号では、そんな「活きた場」づくりの方法論を探ります。

CONTENTS

特集

場づくりのその先へ
 ——つながりから社会を変えていく

【対談】

- 02 「創発的な場」を生む仕掛けをどう育てるか
 ——「誰もがいたいようにいられる場所」をデザインする

坂倉杏介 [東京都市大学都市生活学部教授]

山納 洋 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長代理・研究員]

【鼎談】

- 08 ソーシャルイノベーションを生み出すデザインを考える

——エツィオ・マンズイーニの思想をもとに

川地真史・石塚理華・富樫重太 [一般社団法人公共とデザイン]

【インタビュー】

- 14 「お客様」から「当事者」になること

——遊びからつながり、対話から自治が生まれる

西川 正 [特定非営利活動法人ハズオン埼玉理事/コミュニティワーカー]

【インタビュー】

- 20 市民社会から社会を変える

——「文化的コモンズ」が促す、新しい公共のかたち

佐々木秀彦 [アーツカウンシル東京企画部企画課長]

【論考】

- 26 つながりながらも、孤独に陥る若者たち

——失われた場の再生に向けて

石田光規 [早稲田大学文学学術院教授] = 文

【論考】

- 32 北欧のリビングラボ

——当事者を巻き込む、未来づくりの場とは

安岡美佳 [北欧研究所代表] = 文

【書籍案内】

- 38 これからの場づくりを考えるための10冊

【連載】

- 40 『CEL』を振り返る

第5回「トーキング・カフェ」の拡がり

山納 洋 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長代理・研究員] = 文

【連載】

- 44 写真家と大阪

第1回 安井仲治

畑中章宏 [民俗学者] = 文

【連載】

- 46 再見 上町台地 今昔タイムズ

第1回 災害と福祉に見る

「共」の知の継承と文化

弘本由香里 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員] = 文

【研究員レポート】

- 50 豊かな発想を育むには

——「議論の場」の大切さ

前田章雄 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員] = 文

【連載】

- 54 大阪の胃袋

第10回 上方焼饅まむし語り

——東西饅考

湯澤規子 [法政大学人間環境学部教授] = 文

【CELからのメッセージ】

- 56 “活きた場”が社会を変えていく

富尾博之 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長] = 文

【万博遺産 第11回】

橋爪節也 [大阪大学名誉教授] = 文



表紙/尾山台駅前商店街の歩行者天国にて。「タタタハウス」前のカフェスペース (撮影/栗原論)
 裏表紙/「産まみ [む] めも」に展示されたTAK STUDIO +ふしぎデザイン「ハリコドモ」(撮影/宮村政徳)
 大扉/「タタタハウス」(撮影/栗原論)

「特集」場づくりのその先へ——つながりから社会を変えていく」

「創発的な場」を生む仕掛けを どう育ててるか

「誰もがいたいようにいられる場所」をデザインする

対談

「東京都大学都市生活学部教授」
Sakakura Kyousuke

坂倉杏介

山納洋

「大阪ガスネットワーク株」
エネルギー・文化研究所長代理・研究員
Yamanoh Hiroshi

人と人がつながり、新たな何かを生み出すような関係性を育てていく。そんな創発的な場。コミュニティをつくるため、私たちはどのように考え、振る舞えばいいのか？
それには、単なる場づくりだけでなく、生身の人と人が関わる実践に本質を探っていく必要がある。
東京都港区の「芝の家」や「三田の家」、さらに世田谷区での「おやまちプロジェクト」など、先進的な試みを通してコミュニティ・マネジメントを研究されている坂倉杏介さんにお話を伺った。

脇坂敦史「構成」
栗原論「撮影」

「おやまちプロジェクト」の活動の「場」となる、尾山台（東京都世田谷区）の駅前商店街にて。

山納 まず、坂倉さんがどう「場づくり」と関わるようになったか、教えていただけますでしょうか？
坂倉 大学では美術史を学び、就職して博物館や展示会の企画を手がける仕事もしました。でも今の「場づくり」と直接つながるのは、慶應義塾大学の大学院に戻って受けた熊倉敬聡「*1」先生の「美学特殊C」という講義です。そこで出会った4人で、2002年10〜11月に墨田区京島の元米屋の空き店舗を2カ月借り、「京島編集室」と名付けました。折から同地域で開催中のアーティスト・イン・レジデンス「*2」のイベント「アーティスト・イン・空き家2002」と連動する形で、制度的でも商業的でもない「オルタナティブ・ス

ペース」を目指したのですが、私以外は若い学部生ばかり。カフェやワークショップをやるうえにも、やり方がわからない。
結局、事前に用意した考えもすべて手放し、とにかく寝袋だけ持って集まり「住んでみる」ことにしました。すると、近所の飲食店のおばちゃんが炊飯器を貸してくれたり、区役所の方が訪れて廃品がもらえそうな場所を紹介してくれたり、いろいろなことが起こりはじめる。やがて顔見知りも増え、いつの間にか海外のアーティストと犬の散歩途中に寄ったおじさん、近所の小学生まで一緒に食卓を囲んでいたり……編集室の存在が、つながりの失われていた住民の自発的なアクションのきっかけとなりました。それが、今に至る原点と言えるでしょうか。

関西の「場づくり」に憧れ 深い影響を受けて

山納 坂倉さんとは、実は2000年代の半ばに初めてお会いしているんですよ。

坂倉 そうなんです。当時は熊倉先生を通し、関西の動向に興味を

もっていました。京都のアーティスト集団「DUMB TYPE」のメンバーだった小山田徹「*3」さん（現・京都市立芸術大学教授）が立ち上げた「アートのスケープ（吉田山）」や「ウィークエンドカフェ（京都大学YMCA地塩寮・会館）」、そして「バザールカフェ」「*4」につながる動きにも憧れていました。当時の東京には、そういうものがなかったんです。

「京島編集室」の経験から、サービスマネジメントを設計するだけの従来のやり方とは違うものに可能性を感じました。慶應義塾大学三田キャンパスのまわりでもできることはないかと思いつき、2006年に始めたのが「三田の家」（2013年閉家）。まさにその頃、大阪の應徳院「*5」や「バザールカフェ」、そして山納さんが手がけた大阪市北区中崎町の「common cafe」も訪れているんです。その時に、日替わりでキッチンを共有するマニュアルを見せ

てもらい、お話も伺いました。
山納 私は、小山田徹さんの、阪神・淡路大震災で被災した方たちが暮らす南芦屋浜復興住宅に屋台

を引っ張っていき、即席の「茶呑み場」をつくって人々をつないでいく活動に、大きな可能性を感じました。もうひとつのきっかけは、大阪市北区の堂山町で閉店するバーをなんとか残すために人を募り「日替わりマスター」をやったことです。そうした経験を経て04年に始めたのがカフェ空間をシェアする「common cafe」で、カフェとしての機能をベースに、より間口の広い「表現の場」をつくりたいという意図もありました。
坂倉 山納さんの「日替わりマスター」のアイデアを含め、大阪や京都に息づく「場づくり」のふくよかさ、緩やかさを「三田の家」の運営でも参考にさせてもらいました。
山納 私の方は、10年ほど前に「芝の家」を訪れたときのことから印象的です。『つながるカフェコミュニティの（場）をつくる方法』（2016年、学芸出版社）という本の準備で関東方面のコミュニティカフェ取材していたのですが、場づくりの意識が低いところが多く、がっかりしていました。しかし、最後の望みで訪ねた「芝の家」だけは、居合わせた人が



上/外と内をつなぐ縁側のある「芝の家」の「しつらえ」。下/座る場所はまちまち、子どもから高齢者まで自由に過ごせる空間。写真提供/芝の家



「ここは知らない人同士でも話をする場所です」と声をかける、優しい自然な流れがあった。「何かが違う、何がどうなっているのだろうか？」と、坂倉さんにいろいろ教えていただきましたね。

そこにいる人すべてが、 いたいようにいられる場所

山納 「三田の家」では、大学の教員の方が日替わりマスターになったのですか？

坂倉 専属のスタッフは雇えないけれど、週1回ずつ担当を決めて誰かがそこにいればオープンということにしよう、と。ある先生が「三田の家」で学会誌を読んでいたら、教え子がひとりいて、その子は編み物をしていました。そう、「家族かよ!」と笑っていました(笑)、まさにそこは「家」でもあった。授業やゼミが終わるとご飯と一緒に食べ、シンクで皿を洗ったりもする。そういうときに話す内容は、教室とはずいぶん違う質感があります。

山納 その後につくられた「芝の家」は、港区芝地区総合支所と慶應義塾大学が協働で運営しておら

外と内をつなぐ縁側が大きな役割を果たしていたのが印象的です。また、「ちょっと懐かしくて、くつろげる空間」が、特に多世代の居場所づくりには有効だとも指摘されています。

坂倉 訪れる人により、その時の気分で座る場所ひとつとっても違います。なので、なるべく多様な「座る場所」を用意しました。

山納 運営面の「きりもり」で感心したのが、オープン時間の前後に行われるというチェックインとチェックアウトです。

坂倉 スタッフはいつ誰が訪れ、何が起るか分からない時間と向き合い、伴走する役割を果たします。その際、「今日はあの書類づくりをしよう」とか「小学生が来たら、一緒にあのゲームをしよう」などと計画をするもの、こうした目論見はほとんどの場合裏切られる。学生を含め私たちはプロではないし、予定や予想通りに事が運ばないというだけで、結構くたびれるんです。何か月か経ち、スタッフの間から自然に「始まる前と終わった後、何か話した方がいいんじゃない?」という声

れます。先ほど「コミュニティカフェ」と言いましたが、単なるカフェにとどまらない。人々の居場所であり、コミュニティづくりの拠点ですね。

坂倉 プライベートな「三田の家」に比べ、「芝の家」は公共事業の性質が強いので、同じではないけれど、「そこにいる人が、いたいようにいられる」を大切にするといい点で共通しています。

山納 小山田さんと熊倉さんが2000年に行われた対談の折、「コミュニティのお茶呑み場」といったまさに先駆的な言葉でコミュニティカフェの可能性を語っておられるのですが、そうした試みが2000年代後半から本場にどんどん一般化しましたね。

坂倉 規模は小さいけれど多様な人が集まり、ひとつの機能やサービスの提供にとどまらない多様な使われ方がされ、自分らしさを発揮できるような関わりを通じ、いろんなことが起こってくる場所。「芝の家」が軌道に乗り、各方面から注目されるようになった頃、さまざまな領域で同じようなことをやっている人たちがいることにな

が上がりました。

山納 チェックインはそれぞれが「今の気分と体調」を分かち合い、その場にいるメンバーがオープンな気持ちになる。チェックアウトはその日の経験を共有して、坂倉さんの言う「場の文化」をつくっていったのだと感じます。

そして最後に「くわだて」ですが、「芝の家」では、すぐに大掛かりなイベントを思い描かず、誰かが何かをやりたいとして、たとえば手描きのチラシづくりなど、今できることからやってみる。「こんなことやりたい」という偶然の思いつきも「出来事」のひとつとして捉え、そこを出発点に次のステップへつなげていますね。

坂倉 ソーシャル・イノベーションやサステナビリティの分野で有名なイタリアのエツイオ・マンズイーニ*6の著作には、「どうすれば、その人たちはダンスホールにやってきて一緒に踊り、その後で話を始めるのか?」といった問いがあり、まさにそれだと膝を打ちました。単に「友達になつて」「つながって」「コミュニティになつてください」と言われても

気づきました。リースクールとか、福祉系でいうと「宅老所」のような場所とか。

山納 小山田さんや熊倉さんなど、アーティストだからこそ、つながりをつくることもアートと捉え、その重要性に気づくことができた。その後の四半世紀、社会の中でそれが方法論として共有されつつあるのを感じます。

「しつらえ」「きりもり」 「くわだて」をデザインする

山納 計画がないのに何かが起きる。「芝の家」を訪れ、その自然な時の流れに感動しました。今も不思議なのは、あの場所を港区という行政体がつくったことです。

坂倉 芝三丁目目は再開発で取り残された下町の雰囲気がある街区です。この地域ならではのコミュニティの問題を解決する拠点づくりとして、行政の担当者が最初に考えていたのは、昭和の遊びが体験できる、もう少し典型的な「公共施設」でした。

でも「お客さん」を呼び、何かを提供するような場をつくっても、コミュニティにつながりを増やし、

無理で、そういう直接に操作できないことを、人々が安心してできる環境をどうつくるか? 私たちが試行錯誤してきたのも、そういうデザインだったと思います。

「近い関係」の再発見が 地域のケアにつながっていく

山納 港区の事業では2013年から、定員20名で約5カ月にわたり実践的な地域活動に取り組む「近所イノベータ養成講座」も行われ、地域活動を進めるための「近所ラボ新橋」*7もある。こうした独特なコミュニティづくりの方法論にも、一貫して「しつ



カフェ、キッチンのほか、コワーキングスペース、プリンタや各種工作道具、ミシンまで備えた「近所ラボ新橋」。日替わりで複数のマスターが運営を担当して、種々の“部活”やイベントをコーディネートする。写真提供/近所ラボ新橋

主体的に地域と関わる人を増やしたいという、行政側の目的を果たすことにはならないのではないかと、そんな真剣な議論を重ね、とにかくオープンで、多様な人の思いを後押しする場をつくらうということになりました。

山納 訪れた人を単なるお客様にしない。ということですよ。最初から「あるべき姿」は見えていたのでしょうか?

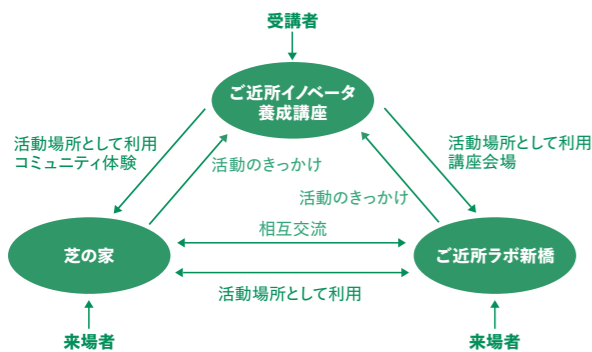
坂倉 仕様書や計画書をつくるというのが行政のやり方ですが、計画せよと言われても、始めてもない段階で、いつ、誰が、どんなことを言ったり、したりするかなんて、わかりません(笑)。互いに学び、話し合いながら少しずつつくっていきました。

山納 そうした時間の中で発見された「誰もがいたいようにいられる場所」をつくる仕組みや仕掛けを、坂倉さんはご著書の中で「しつらえ(空間)」「きりもり(マネジメント)」「くわだて(コンテンツ)」という3つの視点から、わかりやすく解説されています。

たとえば「しつらえ」では、「芝の家」のオープンな雰囲気に、らえ」「きりもり」「くわだて」といったデザイン的な思考が生かされていると感じます(図1)。

坂倉 講座の卒業生に活躍の場がない、ということは珍しくありません。だから場づくりと人づくりを同時に進めるメリットは大きいと思います。特に「近所イノベータ養成講座」は何かを教わるだけでなく、20人がつながること自体に大きな意味がある。地域柄、ふだん誰とも会わないのが普通だったりする港区ですが、この講座に参加すると毎日誰かしらと顔を合わせるようになります。

■図1:「芝の家」を含むコミュニティづくりのデザイン



■図2:ミーティングプレイスが点在する尾山台の町の将来像



右/人と人が出会い、新たな創発が生まれる「おやまちプロジェクト」の活動の「場」として、駅前商店街の歩行者天国が果たす役割は大きい。写真・上図提供/東京都市大学コミュニティマネジメント研究室 左/「タタタハウス」の1階は誰もがふらりと立ち寄れる場所。看護師による保健相談、外国人家族も交えた親子サロンなどのイベント開催も頻繁だ。撮影/栗原論

山納 近いことが、ケアし合う関係性をつくる。公共空間により「関係性の近接」をちゃんとつくることとが、ケアをし合うコミュニティの前提になる。マンズリーニも著の『ここちよい近さがまちを變える』(2023年、Xデザイン出版)で、そう書いていますね。

坂倉 今や地球環境もケアしないと生き延びられない時代。それは子どもや高齢者に対しても同じです。たとえばパリの「15分都市」から企業の方まで、さまざまな人が集いプロジェクトを生む場所にもなっています。

山納 やはりコミュニティづくりであり、それが場づくりにもつながっていった、と。

坂倉 コミュニティというと多くの人は町内会や商店街など既存のコミュニティを思い浮かべます。でも今の時代、それが本当に町を代表しているかという疑問もある。コミュニティは所属するものではないのです。これからのコミュニティは、むしろプロジェクトがつくっていく。ある関心事があり協力して何かやらないといけないから、ネットワークをつくりコミュニティが生まれる。「おやまちプロジェクト」は、まさにそういうコミュニティづくりの試みです。

山納 人とすれ違っても話さないし、カフェで隣に座った人と仲良くなることもない。今の社会を見て、坂倉さんはどんな時代意識をもって活動されていますか？

「*8」といった構想が、日本では単に商業の賑わいや自動車の排除といった話になってしまふ。でも、近接的な暮らしの実感をもつという文脈で理解すべきではないでしょうか。町で一緒に暮らしている人がつながり、融通し合い、何かをする。そういう経験をする、地域の価値や意味合いも大きく変わるのです。コロナ禍を経て世界があらためて発見したのも、その部分だったと思います。

坂倉 実感としても、またアカデミックな研究を見てもよくわからないのですが、ある種の格差が広がっているのではないかと、という危惧はもっています。社会関係資本、あるいは人と人との豊かな関係に触れて育ってきた人と、そうでない人の二極化が進んでいるのではないのでしょうか。

山納 これからの活動の展望も含め、今の世の中にはどんな場づくりが必要か、お聞かせください。

坂倉 ただ居場所をつくり、出会うだけではなく、「町全体がそうやっていく」ことが大切と考えています。商売の場所と考えられていた商店街を私たちが「再定義」したように、図書館も学校も老人ホームも保育園も公園も飲食店もそれぞれの目的を超えた出合いや集いの場、「ミーティングプレイス」として、もつと人々の多彩なアクティビティが重なる場所にしていくはずですね。

これからのコミュニティはプロジェクトが起点になる

山納 東京の尾山台周辺地域で進めている「おやまちプロジェクト」についても教えてください。

坂倉 「おやまち」の場合、これまでとは逆のアプローチから生まれました。2015年から同地の東京都市大学で教えることになり、その翌年に駅前商店街の理事である高野雄太さんと知り合いました。ここは毎日夕方4〜6時に歩行者天国になります。そこで何かできないか？ということから商店街にパイプ椅子を並べ、「ホコ天ゼミ」を行ったのが最初です。

いのですね。

坂倉 興味も関心も違う4人が中心となり、商店街でさまざまなイベントやプロジェクトを行いました。すると、近くに住んでいたけれど出会うことがなかった人たちが、「好き」や「やりたい」をきっかけに出会ふと、驚くほどいろいろなことが始まるんです。やりたい人と、それを実現できる人がつながるといふ、支援のマッチングが起こりやすい。「おやまちプロジェクト」が開催するイベントに行くのと気の合う人ができ、すぐ一緒にやろうと盛り上がりがあります。

山納 そういう地域に根差した新しい関係の中から、ここ「タタタハウス」もつくられたのですか？

坂倉 地域の暮らしの中でさまざまな可能性を探るための「実験場」と考えています。大学で借りているゼミや研究活動のための研究室でもありますが、地域住民からの記事を参照。

*6 イタリアのデザイン研究者。詳細は8頁からの記事を参照。

*7 港区新橋6丁目の公共施設1階にある区民協働スペースを利用した地域づくりの活動拠点。誰もがご近所イノベーション活動を気軽に始めたり、仲間を増やしたりできるような「研究室」や「実験室」として、カフェ機能、コワーキングスペース機能、部活やイベント機能を備えた空間。*8 都市機能の集約とブロック化により、日常のほとんどの用事を徒歩や自転車ですることのできる都市計画。



山納洋 (やまのうゝ、ひろし) 1993年大阪ガス株式会社。1997年生まれ。96年慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。03年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。同大学デザインメディア・コンテンツ統合研究機構専任講師。グローバルセキュリティ研究所特任講師などを経て、16年に同大学院後期博士課程単位取得退学。15年より東京都市大学都市生活学部准教授。23年より現職。コミュニティ・マネジメントとウェルビーイングを領域に研究。「場づくりから始める地域づくり」創発を生むプラットフォームのつくり方(共著、学芸出版社)など著書多数。



坂倉杏介 (さかかくろ、きょうすけ) 東京都市大学都市生活学部教授。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任准教授。一般社団法人三田の家代表理事。一般社団法人おやまちプロジェクト理事。博士(政策・メディア)。1972年生まれ。96年慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。03年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。同大学デザインメディア・コンテンツ統合研究機構専任講師。グローバルセキュリティ研究所特任講師などを経て、16年に同大学院後期博士課程単位取得退学。15年より東京都市大学都市生活学部准教授。23年より現職。コミュニティ・マネジメントとウェルビーイングを領域に研究。「場づくりから始める地域づくり」創発を生むプラットフォームのつくり方(共著、学芸出版社)など著書多数。

ソーシャルイノベーションを 生み出すデザインを考える

——エツイオ・マンズイーニの思想をもとに

鼎談 川地真史×石塚理華×富樫重太 〔一般社団法人公共とデザイン〕

加藤しのぶ 構成
宮村政徳 撮影



大阪市天王寺区の應典院での「産まみ[む]めも」(2024年5月17～26日開催)の展示会場にて。左から川地氏、石塚氏、富樫氏。

お話しいただきたいと思います。

川地 僕は当初、ブログに「海外の公共セクターにおけるデザインの事例と可能性」といった記事を書いていたのですが、富樫さんとはそのブログを通して知り合いました。2016、7年頃のことです。

富樫 当時、僕はデザイン会社で働きながら、デザインのアウトカム(成果)は何なのかといったことを考えるようになっていた時期で、日本のビジネスのあり方やそれに対するデザインの役割がこれでもいいのかといった思いが大きかった。そんなタイミングで会った川地さんとの対話から、海外では「イノベーションラボ」といって政府がデザイナーと協働するようなプロジェクトがあることを知ったんです。

川地 あの頃、僕たちはWebサービス開発に携わっていたけど、周りにそういう話をする人自体あまりおらず、チャットアプリのSlack上にパブリックセクターや民主主義などのキーワードとデザインの関連に興味がある人たちが集まるコミュニティをつくりました。その直後に、僕はフィンランドのアールト大学[*2]の修士課程に留学し、そこで協働的なデザインを学んだり、行政とのプロジェクトを経験したりして、帰国後は日本の社会の公共面の発展に少しでも貢献したいと思い、富樫さんと相談したんです。とりあえず、政策・公共サービス・民主主義などとデザインの関わりについての事例を調べて発信しようと、参加者を呼び

かけたけど、ほぼノーアクションで、思ったよりみんな関心がないんだな、と(笑)。そんななか、参加を表明してくれた石塚さんと3人で、ゆるく活動を始めたのが2020年頃でした。

石塚 私は2015年にイギリスのグラスゴウ美術大学に交換留学したんですが、そこでは行政に提案するようなサービスデザインの授業があつて、自分が今までやってきたスキルや目標をこういうことに使えるんだという点が興味深かった。帰国後はデジタルデザインの仕事に就いたものの、当時はデザインでビジネスを盛り上げるという言葉が全盛の時代で、周りには公共セクターとデザインといった領域に興味がある人も、その方面の仕事も見つかりません。どうしようかともやもやしているタイミングで、ふたりに会ったんですね。

川地 3人ともデザインの領域がビジネス的な成長に回取され、矮小化されてしまうことに違和感を持っていて、そこからデザインの公共的な役割やアウトカムの形に関心を抱いて集まった。それぞれが気づいたのは、消費財としての「売れるデザイン」がもてはやされてきた日本に対し、西欧では何十年も前から「政策・公共サービス・民主主義」とデザイナーの関わりについてデザイナーの問題意識があるという点です。最初はWebなどメディアでの発信から始まりましたが、活動のなかで知り合った方々とプロジェクトをやるようになって、2021年

真の「場づくり」とは、単に居場所を設ければいいわけではない。人が集まり、互いに話し、関係性を豊かにするなかで、住民が当事者意識を持って地域の課題を解決する——そうした活きた場づくりをデザインの視点から取り組む際、イタリアのデザイン研究者エツイオ・マンズイーニの思想は起点のひとつとなるだろう。その考えに強く共鳴し、企業・自治体・共同体と多様な実験を共創する(一社)公共とデザインの共同経営者である川地真史氏、石塚理華氏、富樫重太氏に、場づくりから始まるソーシャルデザインと新しい民主主義の形、それを生み出す考え方や実践の方法などについて、幅広く語っていただいた。

——川地さん、石塚さん、富樫さんは、共同経営する「公共とデザイン」で、東京都では渋谷区とのソーシャルイノベーションラボ立ち上げの伴走、働きやすい職場環境づくりを目的とした京都府亀岡市と地域企業を交えての共創、また「産む」にまつわる価値観・選択肢を問い直す展示活動「産まみ[む]めも」など、さまざまなプロジェクトに取り組んでいられています。

そんな皆さんの共著である『クリエイティブデモクラシー』(2023年、ビー・エヌ・エヌ)では、「デザインがもたらす社会的な影響に着目し実践する先人」としてエツイオ・マンズイーニ[*1]を紹介。彼が提唱する「プロジェクト駆動民主主義」の思想について、大きく紹介しておられますね。今日はマンズイーニの思想に触れつつ、皆さんのお考えやこれまでの活動

に法人化しました。

誰もがデザインする時代のプロジェクト駆動民主主義

——そんな皆さんがマンズイーニの思想に触れたきっかけは？

川地 フィンランドへ留学する直前くらいにマンズイーニの『Design, When Everybody Designs』を手に入れたのが最初です。2015年に発刊されたもので未邦訳ですが、デザインの世界に与えた影響は非常に大きい。まずタイトルから「デザインせよ。誰もがデザインする時代だ」という強いメッセージがあります。

石塚 マンズイーニの考えは社会と民主主義とデザインというような本には必ず引用されていて、私も『Design, When Everybody Designs』を読み、考え方に共感したのを覚えています。ちょうど、先に話したもやもやがあつたタイミングで、自分の仕事のあり方を新たな角度から考えるきっかけになりましたね。

富樫 DEISS[*3]というソーシャルイノベーションのためのデザインの国際ネットワーク団体があり、その中核的存在であるマンズイーニが提唱したのが「プロジェクト駆動民主主義」です。これは、人々が自分自身の人生や人生の一部に関わる目的を達成するための、話し合いや行動に結びついた実践——「ライブプロジェクト」を通じて、既存のシステムの外に出る動きのこと。その、プロジェクトを実践

する活動こそ「デザイン」であり、専門家だけでなく、関わるすべての人が「デザイナー」になり得るという発想に立っています。

その考えに興味を持ち、マンズリーニが書いた『日々の政治 ソーシャルイノベーションをもちろすデザイン文化』（2020年、ピー・エヌ・エヌ）を読みました。川地さんと活動を始めた頃で、デザインの民主主義における役割とはどういうものかという内容、みんながデザインしているという考えが印象に残っています。自分にも何かできるかも、という大きな可能性を感じましたね。

川地 マンズリーニの思想の時代背景を言っておくと、彼自身が大きい影響を受けた運動として、1970年代にイタリアのトリエステという町で民主的な医療運動に取り組んだ、精神科医フランコ・バザリア^{【*4】}のことを挙げています。当時、精神疾患のある患者は隔離された閉鎖病棟に置かれていたのを、草の根運動から初めて地域の中で一緒にケアしていこうという動きになり、最終的に精神科病院廃絶を謳う、いわゆる「バザリア法」が実現。これはそれまでの当たり前とは全く異なる、オルタナティブ^{【*5】}だった。こうした草の根運動の背景が、ソーシャルイノベーションの思想にもつながっている、とマンズリーニは書いています。

富樫 マンズリーニは、今まで通りの「こうしていればうまくいく」という伝統的なスタイルを「慣習モード」、自らが自分の生を自律的に

デザインすることを「デザインモード」と対比して表している。伝統的なスタイルが消えた流動的な今の時代、「慣習モード」ではやっていけなくなり、自分がどうしたいかを自分で決めて自ら環境をつくっていく「デザインモード」に切り替えていくことで、人間の潜在的な可能性が解き放たれると言っています。

川地 『日々の政治』には「デザイン能力とは歌うようなものである、僕たちはみな歌うことができる」とあります。人は誰もが、社会関係を再生するデザイン能力を持っていて、それはたとえば「批判的思考」「創造性」「分析能力」「実践的思考」といった能力である、と。そのうえで、僕たちのような専門のデザイナーはそれを発揮するための環境づくりの役割を果たすべき、と言ったわけですね。

石塚 ソーシャルイノベーションという言葉には、国や自治体がトップダウンで施策を行い、私たちの生活に勝手に反映していくイメージもあると思うけど、一方で個人的なプロジェクトが私たちの生活や社会を変化させていくきっかけとなるような働き方もある。そういう私的衝動から公共性を生み出すのが、先ほど挙げたライフプロジェクトを起点にした「プロジェクト駆動民主主義」であり、協働的な参加型民主主義の一形式として位置づけられています。

富樫 参加型のデザイン自体は70年代からあったけど、明確に民主主義と結びつけることをマンズリーニは意識している。それまで読んでき

土台としてお互いに相手を気にかけるような関係をどうつくるかが重要だね」という言葉が印象的でした。場所やものやプロジェクトそのものがインフラになる可能性はあるけれど、他者と出逢い、自分と異なる考え、異なる望みさを持つていることを知る体験こそ大事であり、そのための「うつわ」となる環境を編むということも、これからのデザイナーの役割のひとつだと思いますね^{【*6】}。

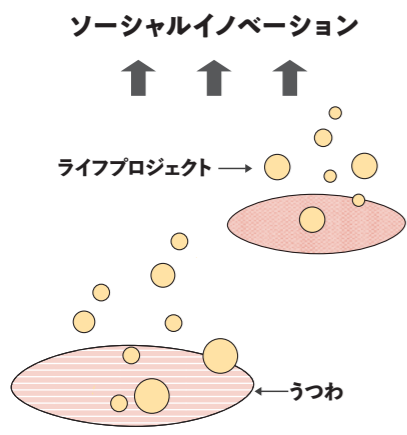
富樫 その点で言うと、ロンドンのEvery One Every Day^{【*7】}は「参加型エコシステム」づくりの代表的な事例です。「家族、友人、隣人の生活を良くする、真の変化には、多くのプロジェクトを一緒に作る必要がある」と掲げ、まずは自宅の近くで、自分と似たような人たち、異なるバックグラウンドを持つ人たちと一緒に過ごそう、と。たとえば一緒にパンをこねる体験を通じて、お互いのことを少しずつ知り、情報を共有し合うなど、ティータイムを過ごすこと

から一緒にビジネスを立ち上げるまで、多様な参加の機会をつくることで、目覚ましい進化を遂げました。

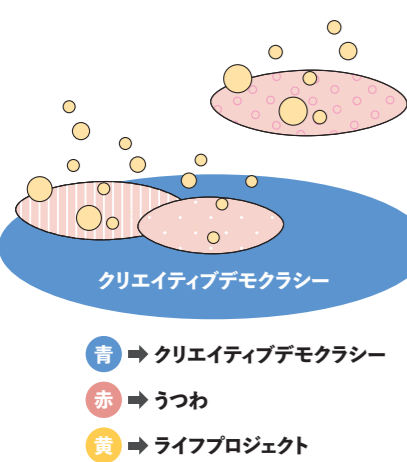
石塚 あの事例はかなり綿密に全体設計がされていて、たとえばふつと来た人がその段階で関わったり、ビジネスを始める人を支援したり、最初のプロジェクトの中でさまざまなパスを準備していますよね。デザインによって、参加の補助線みたいなものがきれいに引いてあるというか……。

川地 ただ、それはきれいな側面だけ見た話だよ。そういう設計を準備することはもちろん大事だけど、結局、何かを始めるときにはそれを動かしている人の態度が大事だと思う。友人がラップバトルのワークショップに参加したときの話だけど、ここでは15分即興でライブを見せて、あと30分で「はい、ここからは自分でライム（韻を踏んだ歌詞）を書いて」というような補助線も何もないやり方だった。でも、友人は

「プロジェクト駆動型」の民主主義=クリエイティブデモクラシーの概念



インフラストラクチャ=うつわを構成する要素 (ルール、関係性、場、ツール、プラットフォームなど)



出典／『クリエイティブデモクラシー』（2023年）掲載の図をもとに作成

た本は、たとえば住民をあまり信頼せずに「どうコントロールするか」という視点から出発するものがほとんどだったんだけど、民主主義の理念に立ち返って考えると、その出発点がおかしいのだということに気づかされるんです。私たちの『クリエイティブデモクラシー』では、マンズリーニの考えをもとにソーシャルイノベーションの定義を深め、「各々のローカルで生きる状況の当事者」わたしと多様な他者が新しい関係を育みながら、これまでの当たり前を問い直し、システムの変容を促す創造的活動」と再定義しています。

関係性の「うつわ」を編む —— 専門家が果たす役割とは

「プロジェクト駆動民主主義」の視点から場づくりを考えた場合、デザインの専門家の果たす役割とはどのようなものでしょうか？

石塚 デザインの専門家としてのケイパビリティをどういう方向に発揮するかは、向き合う土壌がビジネスなのか、社会運動なので大きく分かれている感じがします。ただ、確実に言えるのは、誰もが暮らしを良くしていくためのデザインに取り組むようになったとき、専門家に求められる役割は、これまでのデザイナーとは違ったものになるという点です。

たとえば、前に商店街や小学校と連携しながら地域コミュニティづくりを進めている方と話したのですが、「こういう活動をするときに、

生身の言葉をくらって、下手なりに何とか書けちゃったり。どれだけきれいに設計したとして、生身の関係でそれを「ぐらう」ことの方が、強いんじゃないかという気もしている。

富樫 人と人が出逢うときに補助線は必要というのもそうなのだけど、今、川地さんが挙げたラップバトルのような「触発」が起こるケースも確かにある。この場合、ラップの中に自分の生々しい魂みたいなものが現れて、そこから何かの連鎖が起こったのかなと思う。

やはり、その人の持っているもやもやだったりに、心に引っかかっているものだったり、交じり合う環境をどうつくれるかが重要な気がします。なんでもかんでもデザインできるわけではなく、あくまでその人の内側にある魂だったり、光みたいなのがあったりが出発点になるわけで、それをどう引き出していけるかが大事なのかなと感じます。

石塚 さっき、トップダウンで政策的にアプローチしていくものと、ボトムアップでつくっていくものの両方があるという話をしたけど、それをミックスしたものが必要だとマンズリーニは言っている。制度だけあっても誰も動かないし、ボトムだけが盛り上がりつつも政策につなぐていかないから、両方やりましようねということ。ただ、理論としてはそうだけど、実際にやるのはなかなか難しい。私たちは、それがどうできるかということを探求していく必要がありますね。



1.「産む」をテーマに、多様な当事者の視点に立つての公共化に向けたリサーチ、ワークショップ、展示を行うプロジェクト「産まみ [む] めも」。2.会場では、リサーチを通じて明確化されたさまざまな問いかけを通じて、訪れた人それぞれが「産む」について考えていく。3.与えられたシーンを参加者が即興で演じることで、「産む」にまつわる想像力を深めるツール「産magination」。4.5.産み、育て、家族を営む——それぞれ異なるバックグラウンドを持つ人々の視点を共有する、5組のクリエイターの作品も展示された。撮影/宮村政徳 写真3のみ提供/公共とデザイン

ソーシャルイノベーションは他者との出逢いに依存する

——進行形のプロジェクトの事例として、2022年に始まった「産む」にまつわる価値観・選択肢を問う展示「産まみ [む] めも」についてお聞かせください。

富樫 「産まみ [む] めも」には、一般の方だと見出しづらい領域にも、デザインの課題を見つけることは可能であるという点を、掘り下げていった面があります。その際、プロジェクトの起点となったのは、じつは私たち自身のもやもやでした。みんながそれぞれもやもやすることを出し合って、3人ともがピタッときたのが「産む」ということだった。これは、その時の僕たちが30歳前後で、育った環境や子育てへの苦手イメージ、パートナーの国籍など、それぞれが切実に「産む」に悩んでいたからです。

な課題であり、展示を通じ「産む」への向き合い方を対話と表現で問い直したことで、「わたしの課題」が「わたしたちの課題」として捉えることが可能になったのではないかと思います。この点、マンズリーニが言う「ソーシャルイノベーションは、他者との出逢いに依存する」を少しでも実現できたのは大きいですね。

民主主義はデザインと手を携えて進化していく

——今後は、どのような方向へ進めていくお考えですか。
富樫 「産まみ [む] めも」のプロジェクトは、参加者の方の問いが深まっていくなかで、僕たち自身も当事者としてそのプロセスに触れられました。ただ、それを政策につなげるという点で言えば、この展示が何らかの仕組みに落とし込めるところまでは到達していない。今後は意識して行政の方などルールをつくる側の人たちを集め、ワークショップをすることで何がどう変わるんだらうということに興味を抱いています。

石塚 民主主義とデザインは一見関わりのないもののように感じてしまうと思うのですが、私たちは「民主的である」状態は常に望ましいと思っている、自分たちの仕事をますますそれとつながら考えていきたい。デジタルデザインの仕事をしていたとき、上司に「デザイナーは『イタコ』になって、それを使う人がどういう気持ちでいて、どんなことを考えているのかを代弁するんだ」と言われたけれど、今

川地 先ほど、デザインの専門家の役割について話をしましたが、別の次元の話として、専門家という役割を脱いだ「わたし」として、その場に参与しているという視点も必要だと思うんです。自分が非当事者として外から関わるのは、上空から見下ろしてしまうような関係になるかもしれません。今回の展示ももちろん専門家のデザイナーとして関わっているのですが、一方でデザイナー以前にただ「産む」についての悩みを持っている「わたし」として場に存在する、ゆるやかな当事者であるような関わり方も意識しました。

富樫 このテーマは、あまり公的な場で語られることがないこともあって、自分の思いや考えを言葉にする機会がほとんどなかったという人も多く、「産む」の当たり前を再創造する演劇ツールキット「*6」を準備し、それらを通して言語・非言語での表現方法を交え、参加者同士やっている公共とデザインでの活動や民主的な社会環境を生み出すためのデザイナーはそれだけでは足りなくて、さらに「わたし」としてどうしたいのか、どういうものが望ましいのかをにじませていくことが必要ですね。それをどう実現するか、自分と折り合いをつけながら模索を続けていきたいと思っています。

川地 民主主義というのは未完のプロジェクトだから、プロジェクトを起こすにも力が必要で、そこに平等性がどれくらいあるかという点もデザインの役割になるような気がします。大きなことはできなくても、ひとつ考えの回路が増えたり、手段が増えたりというところで既存のものより前進する——そういうヒントの提示をこれからも続けていきたいですね。

——「公共」「わたしとわたしたち」「起点としてのプロジェクト」と、いずれもマンズリーニの思想を実践し、さらなるソーシャルイノベーションにつなげるものですね。本日は、貴重なお話をありがとうございました。

注

*1 イタリアのデザイン研究者。ミラノ工科大学名誉教授。ソーシャルイノベーションとサステナビリティのためのデザインに関するリーダーとして、これまでにパルセロナのエリサパデザインスクールアンドエンジニアリングや、ロンドン芸術大学など世界各地の大学で教鞭を執る。主な著書に『日々の政治ソーシャルイノベーションをもたらすデザイン文化』や『ここちよい近さがまちを変える ケアとデジタルによる近接のデザイン』(2023年、Xデザイン出版)、『Design When Everybody Design』などがある。
*2 2010年に工科、経済、美術の3つの公立大学が合併して設立。政府の産官学連携型イノベーション推進の核として、エンジニアリング、アート&デザイン、ビジネスの各コミュニティの分野を自在に越境する研究と教育が注目を集めている。

の対話の後押しも試みています。

石塚 会場では「産む」をめぐる協働デザインのプロセスと、5組のクリエイターによる作品を展示しているほか、事前のワークショップには美術作家、デザイナー、建築家といった作家さんにも参加してもらいました。不妊治療や特別養子縁組の当事者・産まない決めた方など、産むことに対して深く向き合った経験知を持つ人、将来子どもを持つことにもやもやしている人たちがクリエイターとグループをつくって、一緒に話を聞いたり、自分の家族像と他の人の家族像について考えてもらったりというプロセスを経ました。私たちは、状況の当事者を含む多様な人々と協働で新しいものごとをつくるプロセス自体を重視してワークショップを設計しましたが、クリエイターの作品づくりにとって大事な時間であったと感じています。結果的に、クリエイターには専門家としての入り口ではない部分で、まず話をするという過程を意識してもらえました。

「産む」と言うと、女性だけの話題のように思われがちですが、これを展示という形で「開いた」ことで、若い男性がひとりで見に来たり、若いカップルがカジュアルに話をして帰っていったりという姿も見られました。参加者の中には展示を見たあと、「産む」を修士論文のテーマにし、今後の進路としてプレコンセプションケア「*7」の研究をするという人もいます。

富樫 「産む」は個人的であると同時に公共的

*3 Design for Social Innovation towards Sustainabilityは、2006年にマンズリーニが創設。持続可能な変化を支援・促進するために積極的に関与しようとするデザイン学校やデザイン系大学に拠点を置く、世界的なラボのネットワーク。
*4 1924〜1980年。イタリアの精神科医。公立精神科病院の廃止を定めた1978年の精神保健法改正の立役者。
*5 2017〜2023年。ロンドン市内で貧困が課題となっていたバッキンガム・アンド・ダゲナム地区で行われた社会実験「住民自らがプロジェクトやビジネスのアイデアを共に育て、素早く実現すること」を目的に、食育・修繕・リサイクル・廃棄物ゼロ・新聞や雑誌の発行など、各種ソーシャルビジネスへの大規模な参加によるエコシステムの形成に成功した。
*6 TOOLKIT「産magination」。リサーチから得られたデータをもとに、特別養子縁組を検討するカップルの会話、不妊と判断された後のカップルや親子同士のやり取りなど——参加者自身が即興演劇することで「当事者になり得る自分」を発見し、そこに生まれる葛藤やもやもやを具体化するためのツール。
*7 将来の妊娠を考えながら、女性やカップルが自分たちの生活や健康と向き合うこと。

一般社団法人公共とデザイン

川地・石塚・富樫の三氏を共同代表に2021年創設。「多様なわたしたちによる公共」を目指すソーシャルイノベーションスタジオ。住民との協働や生活者起点のリサーチ、実験やワークショップ等に基づく事業創出など、社会課題の当事者との協働からのプロジェクト創出に取り組み。法人の著書に『クリエイティブデモクラシー「わたし」から社会を変える、ソーシャルイノベーションのはじめかた』(2023年、ビー・エヌ・エヌ)がある。

川地真史 (かわち・まこと)

一般社団法人「Deep Care Lab」代表。アールト大学Co.Design修士課程卒業。フィンランドにて行政との協働やソーシャルイノベーションのためのデザイン研究を行う。

石塚理華 (いづつか・りか)

千葉大学工学部デザイン学科・同大学院卒業。在学中にクラスゴー美術大学・ケルン応用科学大学に留学。国内外の大学にてサステナブルデザインを学ぶ。大手事業会社でのデザインディレクション業務、受託開発スタートアップの共同創業者などの多岐にわたる分野のデジタルプロダクトのデザイナーや体験設計を経て、現職。

富樫重太 (とがし・しげた)

立命館大学産業社会学部卒業後、株式会社「Anobis」を創業し、社会課題領域の事業立ち上げの仮説検証・コンサルティンに従事。2019年に株式会社「Anobis」を共同創業。住民の困りごとを集め、政策づくりにつなげるサービス「Anobis」を開発する。



「お客様」から「当事者」になること ——遊びからつながり、対話から自治が生まれる

インタビュー

西川正

【特定非営利活動法人ハンスオン埼玉理事／コミュニティワーカー】



大谷みさ子・執筆
逢坂聡・撮影

公園や図書館などの公共空間、保育・介護などの社会福祉事業が「サービスの場」と捉えられるようになって久しい。いつのまにか私たちは「お客様」でいることが当たり前になり、社会をつくる当事者だという意識が薄れてきてはいないだろうか。

そんな「お客様」化した社会に疑問を呈し、人と人が自然と出会い、共に遊び・学びあう場づくりを行ってきたのが「あそびの生まれる場所——「お客様」時代の公共マネジメント」の著者・西川正氏である。市民の「お客様」化によって起こる問題点や、誰もが当事者として参加できる場づくりについてお話を伺った。

西川氏の著書のタイトルにもなっている「お客様」時代という言葉。これは教育、福祉、地域活動による人と人とのつながりですら、等価交換におけるサービスを与える側とそれを受け取る側、「お客様」になってしまった現代社会の世相を表している。

西川氏は、そのあり方に率直に疑問を投げかけ、地域に向けたさまざまなマネジメントやコーディネートを行っている。その「お客様」化の要因についても、自身の経験を交えながら説明してくれた。

「1990年代、大学卒業後に埼玉県にある学童保育所の指導員になりました。そこは県からの補助金が出ていましたが、保護者が役員を決め、保育料も集めて、それを指導員に支払うと

いう、まさに保護者主体の運営形態でした。当時、父母の方々は団塊世代が主力で、議論が大好きな人たちがばかり。何かトラブルが起こった場合も、保護者と指導員みんなが参加して議論を重ね、対応策を決定していました。賛否両論で話し合いがなかなか終わらず、結論は来月にも越しね、といったことも珍しくなく。でも、そこには「対話の文化」のようなものがあり、それが非常に面白かったですね。

ところが、その10年後、自分の子どもが公立の保育所に入ったときには、かなり様相が異なっていました。たとえば、ちょっとでも子どもが怪我をすると、保育士さんたちがすごく謝るんです。それで『これくらいのことですら謝らないでください。怪我をしないで育つ子どもなんているんですか』と訊ねたら、『今そんなこと言うてくださるのは西川さんぐらいですよ』と言われました。以前の学童では、子どもが少し怪我をしたくらいで文句を言う人はいませんが、それが、そのころ保育所は保護者からの苦情に萎縮し、リスクを伴う遊びや行事を避けるようになってしまっていたんです」

サービス産業化により まちから「あそび」が消えていく

西川氏は、保育所の変化の背景には、社会のサービス産業化があるという。

「保育所が『サービスを提供する場』となり、一部の保護者から『お金を払って預けているの

に』ときまざまな苦情が入るようになりました。すると、上からの『苦情につながるようなことはするな』という指示が強くなります。そして、それまで保護者がみんなで協力し実施していた夏祭りの花火や模擬店といった行事も、役所や保育所から禁止と言われるようになりできなくなりました。『なぜですか』と聞いても『何かあったらどうするの?』という言葉で終わってしまったのです」

この「何かあったらどうするの?」という明らかに否定的な思考からくる問いかけは、今や一般的な仕事の現場や社会のあらゆる場面でよく耳にするが、そこから前向きな議論や対話が生まれるとは思えない。いつしか、保育士と保護者は「あちら側」と「こちら側」に分断されていった。

「かつて、働きながら子育てするお母さんは世の中では超少数派でした。その働きながら子育てするという、自分の生き方を肯定してくれる場所が保育所であり、保育士さんも含めて保育所に行ったら仲間に見えるという感覚があったと思います。だからみんな一生懸命助け合い、お互いの子どもを預けたり預かったりしていました。そして、行事をやると、さらに仲間意識が深まっていきました。

でも、2000年代前半に、行事も含めたさまざまな運営にも関わらなくなっていい、関わらないでくれというような空気が出てきました。ちようど小泉政権の構造改革の頃で、『官から

民へ』という流れのなかで、役所でも住民によりサービスを提供するのが仕事なんだという風に『お客様』扱いはじめたんですね」

こうして共同のいとなみであった子育てがサービス産業化し、市民が「お客様」化していった結果、助け合いやお互いさまといった感覚は薄れた。西川氏はその先にある人びとへの影響についてこう続ける。

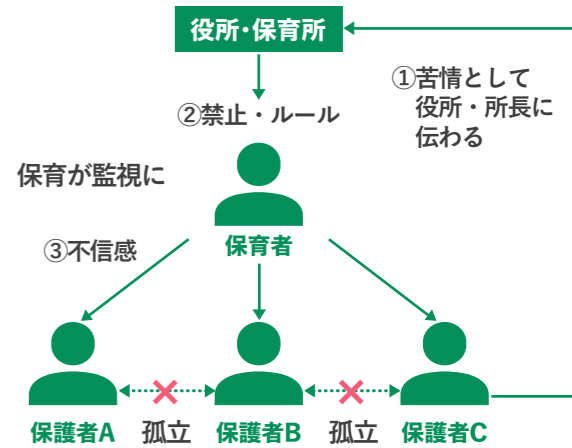
「『お客様』化が進むほど、共同で作業したり、食べたり、遊んだりする場面がどんどん減っていくことになりました。そういうものがなくなる、人は関係を結べなくなる。関係を結べないと、みんな孤立していきます。自分の願い、あるいは違和感があっても、関係が築けていないとその言葉を飲み込んでしまいます。また、クレーマーだと思われるんじゃないかと、言わずに我慢してしまったりします。そうすると、いよいよ我慢できなくなったときに一気に伝えることになり、いわゆる意見ではなく、苦情と受け取られてしまいます。また、担任に言わず、いきなり所長に言いつけたり、役所に苦情電話をかけたたり、対話しながら関係を育てていくことができなくなってしまってます(16頁・図1)」

考えてみると、みんなで作業したり、遊んだりすることは、コロナ禍で不要不急と言われた部分とも重なる。しかしその結果、子どもたちは自由に遊べる場所を、大人たちは心のあそび(余裕)を失いつつある。



上／「おとうさんのらくがきタイム」にて、石こうで落書きを楽しむ子どもたち。道路が遊び場になり、通りすがりの人も巻き込んでいく。
右／「落ち葉の遊園地」。落ち葉の片付けは、居合わせた人びとと一緒にやる。写真提供／西川正

■ 図1: 保育所のサービス産業化における問題



保育者と保護者がサービスの提供者とお客様の関係になると、要望や苦情を役所や所長に「言いつける」親が増え、保育者の不信感が高まる。また保護者（お客様）同士のつながりは歓迎されない。

「安心してできるゆるい遊び場」
「おとうさんのヤキイモタイム」

二人の子どもの父として、保育所の保護者会、小学校のPTA、学童保育に積極的に関わっていた西川氏は、地域で対話できる関係が壊れていきつつあることに危機感を覚え、市民活動を促進する組織として「NPO支援センター」、さらに「ハンズオン埼玉」を立ち上げるなど、地域活動の場を広げていく。

「ハンズオン埼玉はまちづくりをすすめる組織ですが、単にそのための研修や講座、講師の派遣だけではなく、もっと身近にいろんな人が関われる参加型の事業を開発したり、埼玉県内でさらに横に展開していけるような事業をやりたいと思い、立ち上げました」

ハンズオン埼玉の立ち上げ時（2005年）は、

国でも次世代育成行動計画に則した子育て支援を本格的に始動させた頃で、その機運とともに、識者によるシンポジウムなど大きなイベントも開かれていたが、西川氏は身近な遊び場づくりにこだわってきた。そのひとつが、設立当初から展開している『おとうさんのヤキイモタイム』キャンペーン（以降、ヤキイモタイム）だ。

「地元でみんなでできること、何かちょっとやってみようと思う人の後押しができる事業ができないかと。そこで思いついたのが、地域の父親たちに呼びかけ、焚き火を囲みながらサツマイモを焼いて食べるだけの、シンプルな活動です。地域のつきあいをあまりしていないおとうさんに参加してもらい、誰かとながって子育てをする楽しさを感じてもらおうと考えたんです」

地元の生協バルシステム埼玉が主旨に賛同し、



「おとうさんのヤキイモタイム」の様子。1カ所につきサツマイモ10kgを「遊びの種芋」として送るが、足りない分はイモやマッシュマロなどの食材を参加者が持ち寄って楽しむ。2023年より「みんなのヤキイモタイム」に名称を変更。写真提供／西川正



1カ所あたり10kgのサツマイモを提供してくれることになった。

開催の条件は、地域の人が誰でも参加できるオープンな形にすること。参加者は手伝いたければ手伝ってもいい、食べるだけで帰ってもOKの、とにかく縛りのない「ゆるさ」を意識した。反響は大きく、初年度でも32の団体・施設が手を挙げ、以降1000カ所以上で行われているという。

「やっているうちに、これは本当にいい時間だとわかってきたんですね。みんなで火を囲み、ヤキイモを食べた後のグラッとした空気感。親子ども、近所の方もみんないい顔をしているんです」

焚き火を眺めていると緊張がゆるまる、そして緊張がゆるむと気持ちの扉がいつのまにか少し開いて「実は……」と、家族や子育てのこと

を話すきっかけが生まれる。そして、共に子育てをする仲間になる可能性が広がっていく。「これは使える」と、西川氏は感じたと言ふ。

なお、このヤキイモタイムをヤキイモサービスにせず「ゆるい遊び場づくり」にするための工夫がある。たとえば集合時間と開始時間を一緒にすること。主催者側のスタッフは参加者より先に会場に入り準備を整えるのが一般的だが、西川氏の場合は異なる。

「主催者が入念に準備するほど、参加者は来た時点で『あなたはお客様です』と言われていてような気分になります。だから最低限必要な準備以外はみんなが集まってから一緒にやります。

「みんなな場をつくる」ってそういうちょっとしたことなんですよね」

また、なるべく声かけをしていくことも大事だという。かける方もかけられる方も少々ハードルの高い行為に思えるが、西川氏いわく、最初は「いやあ、私は」と相手が遠慮していても「目が笑っていればいける」のだそう。

「参加のハードルを低くする意味で『何もなくてもいいよ』というのは大事ですが、一方で何か役割があった方が安心してそこにいられるということもあるわけです。声をかけられて、何か頼まれたことをやっていたら自分はこの間も大丈夫だと思える。居場所、いやしい場所というのは、多分「安心してそこにいられる」ことなんだろうと思います」

ヤキイモタイムのほかにも、ダンボールと落ち葉でつくったプールなどを楽しむ「落ち葉の遊園地」や、道路を封鎖して落書きOKの遊び場にする「おとうさんのらくがきタイム」など、西川氏はさまざまな遊び場づくりを行っている。「地域の人とつながりにくい現代では、ある程度人為的に遊びの場をつくらないと、対話する機会が生まれませんよ」

「応え」を重視する対話の場
「トークフォークダンス」

近年、西川氏が全国に広げたいと考えている活動が「トークフォークダンス／大人としゃべり場」だ。10年前に、福岡県直方市の中学校の

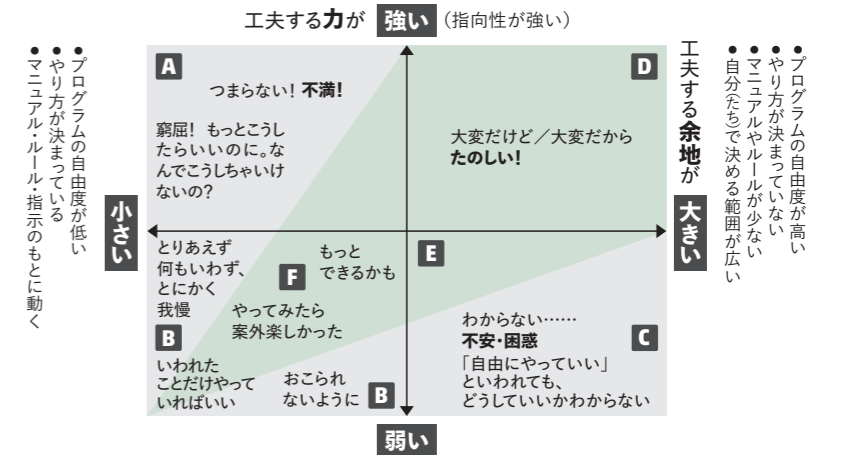


大人と子どもが出会い、対話する「トークフォークダンス／大人としゃべり場」。子どもはもちろん、大人にとっても安心して語り合える場は貴重。写真提供／西川正



2022年より西川氏が館長を務める岡山県真庭市立中央図書館。冬には飲食スペースにコタツを設置し、「コタツで推し本」などのイベントも行う。写真提供/西川正

■ 図2: ボランティアコーディネーションにおける、工夫する力と工夫する余地の関係



「工夫する力」は、工夫してみようとする指向性の強弱を表す。工夫する力が弱いとき、工夫する余地の大きいプログラムに参加すると「C不安・困惑」となるが、役割を調整することで「Fやってみたら案外楽しかった。もっとできるかも」の領域になる。

コーディネーション(図2)という概念があつて、ただ工夫の余地が広ければいいというわけではなく、その人に適切な枠があつた方が、新たな表現が生まれる場合もあるということなんです。だから1分間ずつという制約を設けることで、かえって答えやすくもなります。

お題は、最初は『昨日何をしていましたか』など簡単なものですが、徐々に答えにくい質問や、面白い質問を混ぜていくんですね。たとえば、大人に『初恋の思い出を話してください』

ことさえやっていけばいいという精神が蔓延した社会に明るい未来があるとは思にくい。西川氏は「対話による自治」こそが、自由を感じながら生きるための道ではないかと説き、手がける活動のすべてにその意図が反映されている。これは西川氏が館長を務める岡山県真庭市立中央図書館のある日の出来事だ。充電OKの飲食スペースで子どもたちがゲームをしていると、匿名の市民から小学校に「充電し放題でゲームをやらせていいの」とクレームが入った。そして先生が図書館にやってきて子どもたちを怒り、さらに後日、全員に反省文を書かせたそう。それに対し西川氏はこう語る。

「そもそも大人も充電OKですし、そのとき子どもたちは誰にも迷惑をかけていませんでした。もし迷惑を感じたのなら直接伝えればいいのです。そういう大人に育ってもらいたいと思っ

と聞くと、おじさんたちは『えっ!』と嫌がりつつも、汗をかきながら答えてくれたり(笑)。また終盤には、『幸せってどういうことですか』『幸せになるために何が必要ですか』など、哲学的な問いを入れます」

西川氏が特に気をつけているのは、話し手の、特に中学生の安心を保障することだ。

「大人に相手を否定したり、説教したり、アドバイスしたりしないでください、とお願ひします。大人が子どもに押しよかれと思ってしまうアドバイスは、一見親切でよさそうですが、現状の評価(否定)になります。もっとこうした方がいいというのは、今の君はダメだと言っているのと同じです。大事なことは、その人の言っていることをそのまま受け止めること。正しい「答え」はありません。相手に寄り添う意味で「応え」あつていくことです。それが『何かやってみよう』という気持ちを生みます。『今日は否定されないんだ』と思えた瞬間から、授業でまったく話さないような生徒が喋り出すんですよ」

たしかに、大人数が集まる場でも、目の前に相対する人が自分を決して否定せずしっかりと話を聞いてくれるとわかれば、安心感が生まれるだろう。1分間という区切りも考え込む余地がなく素直に自分の感情を出しやすい。そして、自分とはまったく違う思考を持つ人たちの話に耳をかたむけるうちに、いろいろな気づき(学び)も得られるだろう。

学校を訪ね『通報されて先生が注意に来るということは、自分にとって不都合があつたり嫌なことがあつたら、学校や行政に電話すればいい』と考える市民が育つだけ。その姿を子どもたちは見えていますけれど、『いいんですか?』と校長先生にお訊ねしたら、『たしかにそれは嫌ですよ』と同意してくださりました」

ちなみに、西川氏が真庭市とつながるきっかけとなったのは、市民参加型のまちづくりを進めていた市側からサポートを依頼されたことか、らだったそうだが、この校長との対話からも西川氏のブレない姿勢がみてとれる。図書館業務でも「なるべくルールや規則は設けず、対話を大切にしている」そう。

なお、西川氏の著書には「現在の子どものいる場所の姿は、将来の社会の姿——自治は体験の中でしか学べない」と記されているが、こう補足する。

「昔は、子どもだけで勝手に遊んでいました。自分たちで考え、他者と関わるなかでルールを学ぶ、それはある意味で自治でした。でも、命に関わる事故の可能性もあり、子どもだけでやらせるのは問題となりました。しかし大人がいると、大人は子どもをコントロールしたり、主体性を無視してやってあげたりしてしまいます。それゆえ、これからは、学校や学童保育、さまざまな遊び場でも子どもが自治できるよう先生や大人がファシリテーター*2することが大切です。共に考え、意見が割れたら対話を重ねて折

心のあそびを取り戻し
自治のある社会を目指す

さまざまな仕掛けにより、子どもも大人も遊べる場づくりを行っている西川氏。遊びを重視するのはなぜなのでしょう。

「あそびには2つの意味があります。いわゆる遊ぶ(やってみる)と、ハンドルなどのあそび(余裕、余白)です。今は、心のあそびが失われた時代です。それは、自己責任と言われる社会になったからです。真面目な親御さんほど、子育ても自分の責任だと思ひ、誰かに相談したり、『助けて』と言えなくなる。仕事もそうですが、一緒に苦労したりすると、みんな仲間になっていくじゃないですか。そして、信頼できる関係が生まれると、何か新しいことを『やってみよう』と思ひます。多少失敗があつても、失敗自体がプロセスの一部になり、『おもしろかったね、次はこうしよう』となつていくと思うんです」

こういった共同性が社会から奪われていつているのは、社会がシステム化している影響もあると言ひ。システム化した社会では多くのルールやマニュアルがつけられるが、何か問題が生じたときに、マニュアル通りにやつていなければ、やつていなかつた人のせい、マニュアル通りに行つたのに失敗したのならマニュアルを決めた人のせいと、責任が明確になる。責任を問われなければ余計なことはしない方が得なのだ。しかし、自分で思考せず、決められた

り合いをつけ、その決断にみんな責任を持つ。そうすれば『何かあつたらどうするの?』が『何かあつても、大丈夫!』に変わるはずだ」

西川氏が人との関係づくりには必須と考える「不要不急」の活動も、コロナによって制限され、子育ての環境は逆風傾向にある。しかし、その一方で、働き方が見直されたり、不要不急とされた遊びの大切さにも気づかされたのではないだろうか。人は本当に困つたときにこそつながりを求めたくなると実感した人も多いはずだ。「お客様」ではなく「当事者」として、対話のある遊びの生まれる場や組織づくりに関することから、自治のある社会を真剣に目指していきたい。



西川正 (しかわ まさひろ)

特定非営利活動法人シズオン埼玉理事。コミニティワーカー。1967年、滋賀県生まれ。学童指導員、出版社、障害団体のスタッフ、NPO支援センターの事務局長を経て、2005年NPO法人シズオン埼玉を設立。毎年数千人が参加する「おとうさんのサキモタイム」キャンペーンの筆頭に、「大人としべり場」など市民参加型のまちづくり、子育て支援の場づくりを専門とする。元恵泉女子学園大学特任准教授、大妻女子大学等で非常勤講師。埼玉県地域福祉推進委員会委員。2022年4月より、岡山県真庭市立中央図書館館長。著書に『あそびの生まれる場所——「お客様」時代の公共マネジメント』『あそびの生まれる時——「お客様」時代の地域活動コーディネーション』(ともに、こちらから)がある。

*1 福岡県直方市の中学校の体育館で、同校PTAが主催、市民グループ「おがた未来カフェ」が支援し開催された。

*2 ここでは、子どもが主体的に関われるよう、工夫する余地と力に必要な調整をかけること。弱い立場の者や少数派の意見が蔑ろにされていないかなどに気を配ることなどが求められる。

市民社会から 社会を変える

「文化的コモンズ」が促す、新しい公共のかたち

インタビュー

佐々木秀彦

「アーツカウンシル東京企画部企画課長」



山納洋二聞き手
協坂敦史二構成
古里麻衣二撮影

ミュージアム、図書館、ホール、公民館等の文化施設は今、地域住民の拠りどころとして、また交流の場としての役割を担うことが求められている。この核心にあるのが「文化的コモンズ」である。文化を媒介として人びとを結びつけ、豊かな関係性を育む場としての文化施設の創出は、市民参加型の地域づくりや新たな社会像の構築に寄与しうるのだから。『文化的コモンズ文化施設がつくる交響圏』を上梓した佐々木秀彦氏に見解を伺った。

——「文化的コモンズ」とは何か、なぜそれに注目されたのか、教えていただけますでしょうか？

佐々木 「文化的コモンズ」とは、地域社会において誰もが自由に参加できる文化活動の総体を指します。これは、文化施設、団体、商店街、教育機関など、多様な主体が相互に関わり合うことで形成される、地域固有の文化的な共有空間や活動のネットワークのことです(図1)。この考えは私のオリジナルではなく、東日本大震災を経て文化施設の役割を見直すため、一般財団法人地域創造が2014年と2016年に出した報告書「*1」の提言によるものです。これを読んだとき、大きな感銘を受けました。なぜなら文化施設を地域住民が共有するという発想から一歩踏みだし、場を通してつくられた関係性や文化そのものを「文化的コモンズ」と呼んでいたからです。

コモンには「共通の、公の、公共の」という

た意味があり、日本で、山林や原野を集落の人びとで管理してきた「入会地」もそのひとつです。

——これまで学芸員として、ミュージアムを支えるボランティアだけでなく、外部のさまざまな人びととの関わりを重視する仕事をされてきました。

佐々木 2000年の東京都の行政評価で「抜本的な見直し」の対象となり、閉園の危機にあった「江戸東京たてももの園」の再生に取り組んだ際にコミュニティやボランティアの力を借り、その可能性の大きさを感じました。また、東京都美術館では2012年から東京藝術大学と、アートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト「とびらプロジェクト」を展開し、専門家とともに美術館を拠点

に人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動をするアート・コミュニケータ「とびら」の養成に携わりました。こうした自分の仕事を振り返り、まさに「文化的コモンズ」をつくることだったと気づいたので。

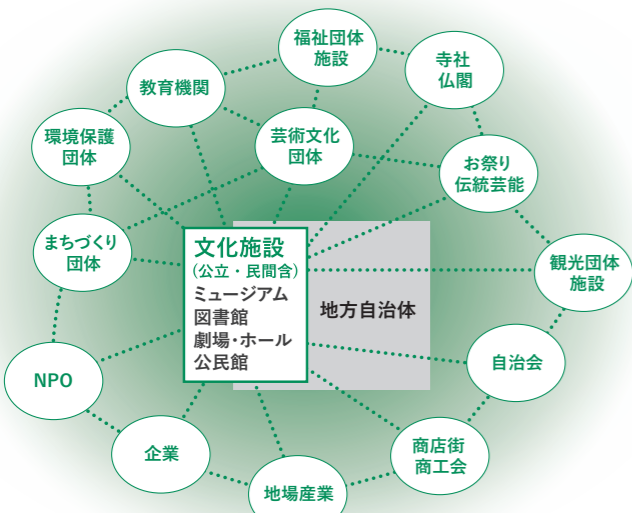
私は研究者ではなく実務者です。これが大切というビジョンだけでは足りない。現行の文化施設はどうつくられ、どんな制度のもとで存在しているのか？ 私たちはそれらの施設をどう使いこなせば豊かな「文化的コモンズ」をつくることができ、どうしたらそれは持続可能なものになるか？ そんな視点から書かれた実践論が欲しい。ミュージアムや図書館、劇場・ホールなど、施設の種類により異なる各論も紹介しながら、地域社会で実装できるようにしたい。それがこの本を書いた動機でした。

文化施設をつくった 創設者たちの熱い思い

——「著書では、ミュージアム、図書館、公民館、劇場・ホール、福祉施設のそれぞれについて、戦前からの歴史を概観しています。いずれも源流に偉大な方々がおり、それぞれ熱い思いをもっておられた。

佐々木 たとえば公民館と聞いて、高齢者などを相手に会議室を貸している場所、といったイメージをもつ方は多いと思います。けれども公民館創設の功労者である寺中作雄「*2」が語った言葉をひもとくと、今と通じる「場づくり」に懸ける思いを感じます。「郷土の交友和楽を

図1:文化的コモンズのイメージ図



地域創造による報告書「*1」の概念図をもとに作成

培う文化センターとしての施設を心から求めている。みんなが気を合わせて働いたり楽しんだりする溜まり場の施設が必要だ。これは現代でいう「まちづくりセンター」「ファブラボ「*3」といったプラットフォームに近い発想ですよね。いわゆる公立の施設だけではありません。1916年に愛媛県喜多郡内子町の有志がつくった劇場である「内子座」のように、民間でもやはり「場づくり」の熱気があったと思います。ミュージアムも当初は私立(プライベート)の割合が多かった。

——そうした「熱い思い」で施設の核がつけられたのに、いつのまにか劇場や公民館が単なる「貸館」になってしまったり、無駄なハコモノと批判されたりもする。

佐々木 自治体が法律を握りどこに施設をつくり、それを全国に行き渡らせた意義は大きいけれども施設の整備と維持管理が中心の世界になってしまった、という部分はありますね。自治体がハコモノをつくらせて運営すると、魂のほう忘れられてしまうところがあるのかもしれない。結果的に、ファシリティづくりと、「場づくり」の熱気をもった運営が一致し、施設を中心として住民が主体的に活動する幸せな時代は長続きしなかった。

けれども、私は他人とのつながりが薄くなった現代では、公立の文化施設が、人びとが好きなテーマで集い、既成の秩序に縛られずフラットに楽しみ、社会に影響を与える場になりうる

図2:文化施設の世代論

区分	時期	中心課題 官民の構図	施設の当事者		
			設置者	専門家	市民
1.0	《創生期》 1910-1945 大正デモクラシーから敗戦	施設の創出 官/民による建設	統治者(官) 篤志家(民)	番人・管理人 =監視・監督、 思想善導	臣民: 教化の対象
2.0	《成長期》 1945-1990 戦後から バブル期	施設の設置 サービスの提供 官主導・民補完	サービス提供者	専門職、事務 =指導・助言、 施設管理	国民: 啓蒙・育成の対象
3.0	《再考期》 1990-2011 バブル後から 東日本大震災	施設の開放 参加、広場づくり 経営への着目(効率重視) 官民役割の見直し、 民間活力導入	運営委託者・ 評価者	専門分化 =高度な技能提 供、サービス・プ ロバイダー、施設 経営	住民: サービスの消費者・顧客、 主体的な利用・参加の 対象、サポーター
4.0	《成熟期》 2011- 東日本大震災 以降	施設の自治 コモンズの形成 共の創出 官民団の連携協力	基盤の提供者、 経営・活動の支 援者(行政) 文化起業家 (民間)	つなぎ手、橋渡 し役=アクセス保 障、プラットフォーム・ ビルダー、コー ディネーター	市民: 運営・利用の当事者、プ レーヤー、オーナーシッ プ、文化起業家(カル チャー・アントレプレナー)



大阪自然史フェスティバル。自然に関わるサークルや自然保護団体、博物館や企業が集まり、ワークショップ、物販、講演などを通じて、大阪周辺の自然の現状や自然に関わる楽しさを市民に伝えている。写真提供/大阪市立自然史博物館

のではないかと考えています。過去に熱い思いをもって文化施設が生まれたような動きは、自然発生的には起こりにくい。人工的に意識的につくりなければならぬと考えています。

**好きなものを通して
つながり、響き合う**

——文化的コモンズを通し人がつながり、楽しみながら社会に関わる。「著書ではそのことを「交響圏」という言葉で説明されています。

佐々木 自由を選択し、脱退し、移行し、創出するコミュニティを「交響するコミュニティ」と名付けた社会学者の見田宗介^{＊4}から借りた考えです。それを実現させている文化的コモンズの例はいくつもありますが、特に大阪市立自然史博物館を挙げたいと思います。

市立図書館は、まさにその一例だと思います。——創生期の場づくり(1.0)から、戦後からバブル期には施設の設置と拡大(2.0)があり、バブル後は公共施設の意義について見直しが行われるようになった(3.0)。そしていま、「文化施設4.0」と呼べる新しい動きのなかで、福祉施設やお寺といった例が出てきたのも印象的です。

佐々木 文化的コモンズが、分野を超えて同時多発的に生まれてきていると感じています。お寺はもともと「学び」「癒やし」「楽しみ」と

大阪には江戸時代から、木村兼葭堂^{＊5}をはじめとするアマチュアのナチュラリストの伝統がある。そういう熱心なアマチュアの手によって、この博物館の活動はつくられてきたのです。後援会や友の会、さらに2001年に設立されたNPO法人「大阪自然史センター」など、名前や組織の形は変わっても、博物館をとりまく各種サークル活動やコミュニティがいつも重要な役割を果たしてきた。歴代館長や学芸員もそれを強く意識した運営を行い、継承してきたことに感動します。

——動物の標本をつくる「なにわホネネ団」の活動など、とても楽しそうです。

佐々木 入団希望者はタヌキ一頭の皮を一人ではぐそうです。そんな活動を70歳の高齢者から小学生の女の子まで、一緒にやっている。年に一度の「大阪自然史フェスティバル」は標本好きだけでなく、石好き、虫好き、植物好きなど、ふだんは交わらないさまざまな「好き」が一堂に集まるお祭りや、ミュージアムのコミュニティがみごとに「可視化」されます。人間が人間らしく生きることや、最近よくウェルビーイングと言いますよね。つまり健康でご機嫌な状態です。フェスティバルに集まった人たちを見ていると、まさにウェルビーイングな感じがするんです。

——文化的コモンズは、おそらく歴史上のあらゆる時代と場所にあったのでしょうか。

佐々木 伝統的な祭りなどを見ると、楽しむた

いった価値を実現する場でもあったのですが、今は「お寺ルネサンス」と言われるほどに大きな転機を迎えています。もはや葬式だけでは成り立たないという意味で、文化施設と共通する課題意識をもっています。「日本で一番若者が集まる寺」として知られる大阪の應徳院は、劇場・ホールであるとともに公民館のような役割も果たしています。また最近ではアートに関わるお寺として、さらに「コミュニティケア」の可能性を考えようとしています。

文化資源を基盤に人が集まり関わるということは、何かを大事にする心があるということだと思います。文化的な何かに好奇心が呼び起こされ、それを分かち合うこと。それらを今の言葉で言う「ケアとシェア」ということになるのではないのでしょうか。

——同時多発的に起きながらも、これまでは分断されていた動きをつないでいくような、「連携」の可能性はあるのでしょうか。

佐々木 2013年度から東京・上野のミュージアムや図書館、劇場、そして大学が連携し、施設間を人びとが行き交い、学び合うことを目指した「Museum Start あいうえの」をスタートさせました。私が所属するアーツカウンシル東京も複数の都立文化施設をつなげていく役割を果たしています。文化資源を活用してウェルビーイングを高めるといふ問題意識やテーマ、手法は施設が違っていても共通しているし壁はないと感じました。

めにコミュニティや人がつながることがいかに普遍的吧かります。ただ、今の日本はそれが弱くなっていると感じます。インターネット上のSNSなどで人と人がつながれるかもしれないが、すべての人にとって健康でご機嫌な状態となっているのかは疑問です。

**これからは
「文化施設4.0」の時代へ**

——佐賀県の武雄市が、2013年にカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社を指定管理者とし図書館を再整備した、いわゆる「ツタヤ図書館」が話題になりました。それに対し、2016年に開館し、市民の交流や連帯を育む広場としての新たな図書館像を打ち出した瀬戸内市の事例も丁寧に紹介されています。

佐々木 財政状況が悪化するなか、文化施設の存在意義が問われるようになりました。民間企業の経営原理を取り入れる新公共経営(Zem Public Management 以下、NPM)の考え方が広まり、その象徴といえるのがツタヤ図書館ですね。ツタヤ図書館は、従来の本の貸し借りの場から、カフェや書店を併設し、多様な利用者が集う滞在型の新しい図書館モデルを提示した一方で、商業主義優先、不適切な選書など、公共サービスとしての課題を抱えていました。そして、それとは別の道で地域の場とならんとする公共施設も出てきて、私はそれを「文化施設4.0」と呼んでいます(図2)。「人づくり」や「コミュニティづくり」に焦点を当てた瀬戸内

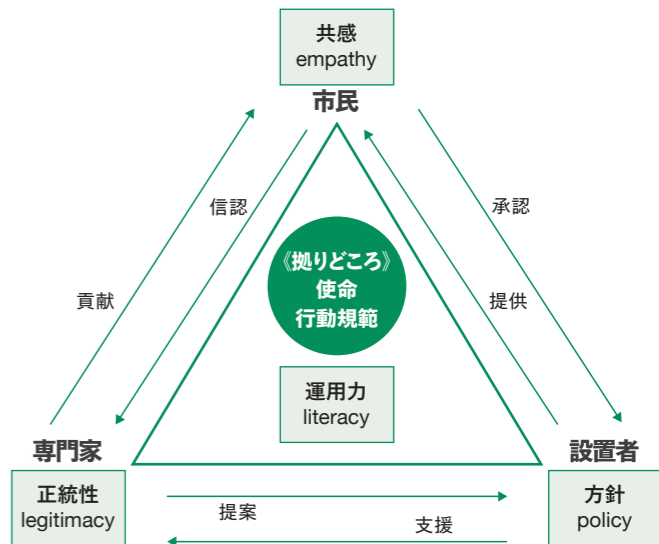
これまで文化施設は、もっぱら個々のコンテンツ・キュレーションに力を入れてきました。ミュージアムなら企画展を開くとか、ホールでコンサートを企画するとか、公民館で講演会を開くとか。でも、それだけでは足りないし、人びとのニーズに応えられない。学校と組んで教育普及プログラムを始めたり、障害をもつ方も鑑賞してもらえようにしたり。社会課題に貢献する取り組みをつくるような仕事により大切になっていく。私の造語ですけど、それをソーシャル・キュレーションと総称しています。ソーシャル・キュレーションを大切にしていくのが「文化施設4.0」の特徴でもあるのです。——さまざまな場所で人びとがビジョンを共有しつつあるように感じられ、興味深いお話です。

佐々木 地方の自治体においても、施設や団体が連携してつながることで文化的コモンズを活性化させる取り組みが始まったところ。2022年に大阪・八尾市が策定した「八尾市芸術文化推進基本計画」には、高校合同文化祭やまちかどライブクリエイションといった取り組みを通じて、市民の日常生活に芸術文化活動を浸透させる有機的なネットワーク「やおうえるかむコモンズ」を形成することが謳われています。

**ミッションを明確にし、
文法を共有する**

——文化的コモンズとしての施設をどうつくり、持

■ 図3:文化施設統治の三角形



続させるか。文化施設のガバナンスやマネジメントで大切な使命（ミッション）とはどのようなものだろうか。

佐々木 公共事業で使える予算が減るなかで、文化施設の意義が問われるようになった。人びとが「文化的コモンズ」に着目する大きな前提として、その影響は大きいと思います。NPMの考え方から、ミュージアムや劇場ならチケットの売り上げ、図書館なら来館者数などの数値で評価されることが当たり前になりました。成熟あるいは縮小する社会において、それぞれの施設が資源を共有して知恵を出し合っているか、いと破綻してしまっているのではないかと、危惧を多く

**政策として具体化し、
社会を変える力にする**

「場づくり」がコミュニティ、世の中を変える力にもなるのではないかと、という感覚をもつことがあります。一方で法律や仕組みなどさまざまな制約もあり、それを乗り越えるにはどうしたらよいのか悩むことも多いのです。

佐々木 政治学者・松下圭一^{*1}が言うところの「政策型思考」、つまり、社会の課題を具体的な法や政策、制度に落とし込んで解決を図る考えが重要だと思っています。ミュージアムや図書館、公民館が今のような施設としてあるのは、かつて熱い思いをもった人たちが法律制度を確立したから。「こういう場所があったらいいな」だけでは何も起こらず、政策にしなければなりません。芸術文化に関わる専門職が意識する必要があります。「健全なアドボカシー活動」、つまり芸術文化の価値や必要性について声を上げ、政策提言を行うことです。

——子育て施設と図書館、高齢者への健康支援を合わせたような複合施設の新設が相次いでおり、地方自治体の選挙でも争点になることが多いようです。しかし、お話を伺っていて、選挙で代議士や首長を選ぶこと以外にも、市民がより主体的に文化的コモンズに関わることが可能なのではと感じました。佐々木 日々の施設運営、経営・統治、存続に関わることなど、いくつかのレイヤーで考える必要があると思います。「伊丹市立図書館こと

くの人が共有しているのです。

しかし実は現場の専門職が施設の存在意義を語る言葉をもっていない。あるとしても「図書館の意義とは?」「公民館の存在価値とは?」「ミュージアムの役割とは?」といった一般論であり、なぜこの街にこの図書館が必要なのか?といった、その施設が魂としてもっている「使命」とは違うものでした。たとえば、「この市の図書館は子どもが本に触れる機会を増やすことが大切」というミッションを共有できれば、単に来館者数やお金の収支だけではない形で評価することも可能になるでしょう。

——文化施設のガバナンスについて、設置者、専門家、市民の三者の関係を図示されています(図3)。こうした考えはオリジナルですか?

佐々木 私が展開する文化的コモンズのガバナンス論やマネジメント論は、まず経済学者・宇沢弘文^{*6}が提起した「社会的共通資本」の概念を参照しています。たとえば宇沢は、プロフェッショナルたる専門家が信認(フィデューシアリー)の原則に基づいて行う運営や管理を重視しています。それは医療や教育のように、ある部分では知識や技能をもつ人に「身を任せろ」という考え方です。イギリスの文化政策の専門家も、やはり同じような三角形を使って文化施設のガバナンスを語っていますが、このような図に描いたのは私のオリジナルと言えるかもしれません。

——設置者の横暴であったり、専門家の説明不足であったり……さまざまな事例が思い浮かびますし、三者のあいだでどうバランスをとればいいのかという?と考えると答えずにはいられません。一般に「行政が文化団体やアーティストに口を出すな」と説明されるようないわゆる「アームズ・レンゲス」の原則^{*7}も、この図を見れば一目瞭然です。

佐々木 これまで多くの場合、三者が共有する「見取り図」や「文法」がなかったと思います。文化的コモンズを成り立たせる利害関係者が互いにどのような関係にあり、どんな義務を負い、何を提供し合うのかといったリテラシーをもつことが、話し合いの前提として必要です。当事者が自分たちのルールをつくり、それを維持していくことがコモンズであり、いわば「自治の作法」と呼ぶべきものです。この三角形は文化施設に適用した構図ですが、ほかにもさまざまな場面で応用できるかもしれません。

——寺中作雄の言葉を借りながら、文化的コモンズを「自治の砦」と呼んでいらっしゃる理由がよくわかりました。専門分野で知識をもつ専門家ではなく、一般市民に統制権限を委ねることの大切さにも気づかされました。

佐々木 それも行きすぎると、たとえばモンスターパーアレントがPTAや教育委員会を牛耳るのではないかと、といった懸念があるわけですが、やはりバランスが大切です。地域住民を含む関係者がしっかりと参画することを担保しないとコモンズにはならない。

の基本は寛容な精神でしょう。芸術文化に伴ういかかわしきや胡散臭さも許容できるような場であれば文化は育ちません。楽しさ、ご機嫌さ(ウェルビーイング)が基本にあるということ、を忘れるべきではないと思っています。

注

- *1 災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究報告書——文化的コモンズの形成に向けて——(2014年)、『地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究報告書——文化的コモンズが、新時代の地域を創造する——』(2016年)
- *2 昭和期の文部行政官。文部省で戦後の社会教育行政の基礎づくりに従事。
- *3 誰でも自由に使える電子工作器具などが備えられた街の「図工室」。
- *4 昭和後期、平成の社会学者。社会心理学、現代社会論を専門とし、現代日本の社会構造、社会意識の分析につとめた。真木悠介のペンネームでも活動した。
- *5 江戸中期、後期の本草家、文人。博識と書画・典籍・標本・骨董(こつと)の収集で知られた。
- *6 昭和後期、平成の経済学者。理論経済学ですぐれた業績を残す。また公共経済学の立場から、「社会的共通資本」としての教育制度や地球環境問題などに取り組んだ。
- *7 芸術文化振興において、政府や支援者は適度な援助を提供しつつ、創造性と自律性を尊重するため、一定の距離を保つべきという理念。
- *8 昭和後期、平成の政治学者。日本における「統治」から「自治」への政治イメージの転換を提起し、自治体改革に強い影響を与えた。



佐々木秀彦(ささき ひでひこ)

1968年東京都台東区生まれ。アーツカウンシル東京企画部長。専門は文化施設論、文化資源論。東京外国語大学卒業、東京学芸大学大学院修士課程修了。江戸東京博物館、江戸東京たてももの園、東京都歴史文化財団の経営企画、新規事業立ち上げに従事。著書に「コミュニティ・ミュージアム」(岩波書店)、『文化的コモンズ 文化施設がつくる交響圏』(みすず書房)。

つながりながらも、孤独に陥る若者たち

——失われた場の再生に向けて

「早稲田大学文学芸術院教授」
石田光規
Ishida Mitsunori

近年、育ち始めた人間関係を不意に「リセット」するという現象が、おもに若者を中心に増えているという。一見「つながる」とは正反対に思えるこうした衝動は、どこから生まれるのだろうか？

長年、若者世代の孤独・孤立と人間関係を研究する社会学者が、「友だち」のあり方の変化を振り返り、今の時代に人と人がどうつながればいいのか、そこで「場」はどのような役割を果たすべきかについて考察する。

1 つながりの2つの方向性

友だちというと私たちは「何でも言い合えるような深い関係」を想像する。今でもそのイメージは残っているものの、1990年代あたりから、別の友だち像が提示されるようになった。「気を遣いながら、よい状態を維持する関係」である。ここでは仮に前者を「結果としての友だち」、後者を「形から入る友だち」としておこう。

この短い論考では、まず、友だち関係の変化についてまとめ、つながりを求めつつも孤独に陥りがちな若者の実態を明らかにする。それを踏まえ、今後のつながりや場づくりの方向性を

検討する。

2 「結果としての友だち」から「形から入る友だち」へ

友だち関係の変化に大きな影響を与えたのが、社会の「個人化」である。個人化とは社会のあらゆる単位が個人中心に構成される状況を目指す。所有の中心単位は個人になり、何かをするにあたっては集団の意向ではなく、個人の「やりたいこと」が重視されるようになる。日本社会では、友だち像に変化が見られた1990年代に個人化が進んだと言われている。

個人化の影響は人間関係にも及んでいる。私たちは集団とのつき合いを必要最小限にとどめ、個々人の「やりたいこと」や「つき合いたい

人」を優先するようになった。今や職場やクラスの懇親会も必須ではない。誰とつき合うかは個人が選ぶ時代なのである。このような社会において、友だち関係のあり方は着実に変わっていった。

集団の力が強い時代、私たちは所属する集団の人たちと否が応でもつき合わなければならなかった。私たちは、イヤな人ともつき合わなければいけないというマイナス面と引き替えに、安定的な人間関係を享受していたのである。このような社会では人間関係をじっくり育むことが可能である。言い換えると、対立や葛藤を経ながら強い関係を育むこともできるのだ。対立や葛藤を経た「結果としての友だち」は、当然ながら何でも言い合える関係になりやすい。

翻って今の社会では、関係の安定性を担保する材料は乏しい。たとえば同じクラスや隣近所にいるからといって、それが関係をつくる決定的な材料にはならない。このような社会で誰かと安定した関係を築くには、おたがい前向きな状態で相手を選び合わなくてはならないのだ。

俗っぽく表すならば、誰かと安定した関係になるには「友だち」あるいは「恋人」にならないければいけないのである。その際、恋人はたいてい一人に限定されるので、それ以外の多くの人とは友だちになる必要がある。私たちが誰かと安定した関係を築くには、居合わせた人とまずは「友だち」になることを求められているのだ(図1)。

流動的な現代社会を生きる私たちは、居合わせた人と「友だち」になり「友だちっぽい」コミュニケーションを積み重ねることで、つなが

りを確保してゆく。このようにつくられた友だちは、対立や葛藤を経ながらつくられる「結果としての友だち」に対して、友だちという形式優先の「形から入る友だち」だと言えよう。

3 落ち着かず、不安定な「友だち」とのつながり

ただ、居合わせた人と「友だち」になり、「友だちっぽい」コミュニケーションを積み重ねるのは言うほど簡単ではない。というのも、友だちは先輩・後輩や上司・部下、近所の人のようにわかりやすいつながりではないからだ。友だちというのはこうした社会的な関係性とは異なり、結局のところ、おたがいが「友だち」と認識する限りにおいて成り立つ不安定な関係なのである。

では「友だちっぽさ」とは何なのか。これに



イラスト (以下すべて) / タダノなつ (提供/ 講談社)

対する明確な答えを見出せない私たちは、ひとまず、場の空気を保ち、よい関係を維持するよう努める。なぜなら友だちというのは、家族を別とすれば、その他のつながりよりも一段上の「よい関係」だからだ。私たちがいる人と友だち関係を保ち続けようとするのは、そのつながりが他のつながりよりも「よい」と感じているからこそのである。

かくして私たちは、友だちとよい関係を保とうとするからこそ争いを避け、気を遣い合うようになる。今や友だちはかつてのようにケンカを重ねて強くなるつながりではなく、気まずい状態になることをとにかく避けなければいけないつながりに転じたのである(28頁図2)。

実際、大学生と接していると、気の毒になるほど友だち関係に気を遣っていると感ずることがある。たとえば懇親会である。コロナも徐々に過去のものとなり懇親会も復活しつつある。学生も「授業の後に食事などに行きたい」と言っている。それならば、懇親会を企画しないのかと水を向けると次のような返事が戻ってきた。

「懇親会はリスクがあるから開催できない」

一瞬、言っていることが理解できなかったので詳しく尋ねると、真意は以下のようであった。懇親会を開催するといやがる人がいるかもしれない、あるいは、懇親会を開催してもしらけてうまくいかないかもしれない。だから自分から懇親会を開催しない。一方で懇親会に誘われた

■ 図1: 「形から入る友だち」関係が求められる時代とは?

■ 図2：何よりも、気まずい状態になることを避ける若者たち



ら参加はしたい。

つまり、懇親会があれば参加したい。しかし、自ら開催するのはリスクがあるから避けたいということなのである。今の大学生はこれくらい気を遣いながら、友だち関係を築いているのだ。

この「つながりたくてもつながれない」状況は、若年層の孤独感に影響している。図3は内閣官房が2021年から2023年にかけて実施した『人々のつながりに関する基礎調査』で、孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の比率を年齢階級別にまとめたものである。これを見ればわかるように2021年から23年いずれにおいても20代、30代の孤独感が高く、次いで、40代、50代の孤独感が高い。10代（16〜19歳）については、2021年はそれほどはなかったものの、22年、23年は40代、50代と同じくらいに孤独感が高い。まとめると、若年

層の孤独感が総じて高くなっている。人と一緒にいたくても気を遣うあまり声をあげられない若者は、寂しさを抱えつつ日々を過ごしているのである。

4 気遣いに拍車をかける 情報通信端末

このような友だちへの気遣いの傾向に拍車をかけたのが、友だち関係の変化が指摘された1990年代に一挙に普及した情報通信端末である。

振り返ると携帯電話（ケータイ）、スマートフォン（スマホ）が普及する前、私たちは「場」を基礎にして人間関係を築いてきた。大学生であれば授業をやっている教室・サークルの部室・バイト先、社会人であれば職場・なじみの店などに足を運んで、人間関係を築いてきたの

である。その際、待ち合わせでもしていないかぎり、場にきている人ははっきりわからず、人びとは赴いた場にいる人たちと交流することで人間関係を育んでいった。人びとが端末を介して結びつくようになると事情は変わる。たとえば仮に、ちょっと時間ができて誰かに会いたくなったとしよう。そうしたときに私たちがまず行うのは、場に赴くことではなく、手持ちのケータイやスマホをつうじて一緒に過ごす相手を探すことだ。どこに行くか決めるのは一緒に過ごす相手が決まってからのことである。端末を介した人づきあいが一般的になると、一緒に過ごす相手の確保が最優先になり、場は従属的についてくるだけになるのだ。

場が主体の人間関係と端末が主体の人間関係では、結びつく人の質が変わる可能性がある。場が主体の人間関係では、人はどの場に行くか選ぶことはできても、その場にいる人を選ぶことはできない。極端に言えば、前日ケンカした人や折り合いの悪い人が場にきている可能性がある。

これに対して、端末を介した人間関係は、そのようなリスクを極力排除することができる。場と関係なく人間関係を一元的に管理できる情報通信端末を使えば、私たちは会いたい人と直接連絡を取ることができる。私たちは、暇つぶしの相手と会うために、どのような人がいるかわからない場に赴く必要がなくなったのである。

し、場の空気を維持するよう私たちが方向づける。

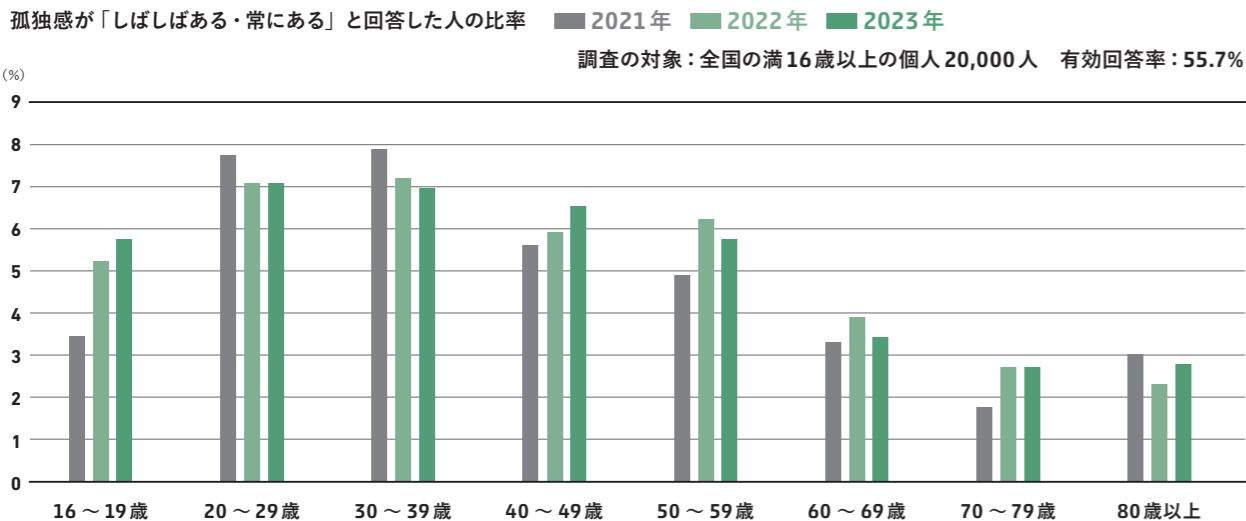
次に後者である。情報通信端末は今まで可視化されていなかったコミュニケーションの細部を一気に暴露した。たとえば交流の履歴である。端末のない時代は誰とどのくらい話したかなどは明確にわからなかった。ケータイ、スマホは、私たちが誰からのどのくらいのタイミングで連絡をもらったのかを明示してしまう。通信の記録は他者からの受け入れの目安として機能する。たとえば誰からも連絡が来ない、あるいは、連絡をしても返信が来ないといった状況は、私たちが誰かから拒否されている事実をわかりやすく示している。

他にも相手のIDを知っているか、トークのグループに入っているか、アカウントをフォローされているか、メッセージをブロックされていないかなど、相手からの受容の程度は多種多様な手段で示される。ゆえに、端末を使ったコミュニケーションでは、相手からの受容度を高めるよういつそうの努力と配慮を求められるのだ。しかも、端末は物理的な距離を無化するため、つながりの輪から離れてホッとする瞬間は訪れない（30頁図4）。

6 今、もう一度「場の力」を見直す

このような事態を打開するために、私が提唱したいのは、第一に友だちのあり方を見直すこ

■ 図3：人々のつながりに関する基礎調査



出典／「令和5年人々のつながりに関する基礎調査結果」（内閣官房）

ただ、そこで難しいのは、一見するとストレスフリーな端末を介した人間関係には、かえって人への気遣いを増幅させる仕組みが内包されていることだ。

5 意識されるようになった 「受け入れ」の度合い

すべての人が端末を介して人とつながるようになると、人間関係はより選別的になる。端末に入った交友関係のリストから会いたい人を選ぶ際、私たちは当然ながら優先順位が高く、会ってくれそうな人から連絡をするだろう。特別な事情がないかぎり、「会いたくない」と思っている人とわざわざ連絡を取る人はいない。同様に、会ってくれなさそうな人に対しては、こちらがよほど「会いたい」と感じていないかぎり連絡はしないはずだ。かくして交友リストの優先順位の低い人はつながりから、自ずと排除されてゆく。

そこで重要なのは、選別できるのは自分だけではないこと、そしてケータイ、スマホなどの情報通信端末は、さまざまな機能をつうじて優先順位を可視化する、ということだ。

まず前者である。当然ながら端末をもっているのは自分だけではない。私もあなたも他の人も端末をもち、そこから会いたい人を検索し連絡を取っている。ゆえにつながりの輪から排除されたくない人びとは、交友リストの上位に入るよう求められていく。その圧力は他者に配慮

■ 図4: 時にはスマホやケータイから離れることで、ホッとできる



と、第二に「場の力」を再生することだ。

「結果としての友だち」の時代、友だちは「いて当然」の存在ではなかった。居合わせた人と多くの交流を積み重ね、やっと授かるのが友だちだったのである。したがって、誰もが友だちを得られるわけではなく、また、友だちがいなからといってすぐさま孤立に陥るわけでもなかった。

一方、先にも書いたようにつながりが流動化した現代社会では、孤独・孤立を恐れるあまり、私たちは競って友だちをつくらうとする。しかし、居合わせた人と友だちになり、その状況を続けるのはなかなか難しい。そうであるならば、私たちは友だちの原点に立ち返り、まず、他者とは「知り合い」としてつながり、そのうえで「友だち」かどうかは時間をかけて判断すればよいのではないか。「知り合い」としてつな

がった人と思いに過ぎせばよい。

その際には、第二のポイントである「場の力」の再生が重要になる。つながりを時間をかけて育むには、つながるきっかけとなる場が必要だ。そこで求められるのは、それほど構えなくてもふらっと立ち寄れるような場である。社交や交流などを前面に押し出しすぎてしまうと、かえってそこに息苦しきを見出し、足が遠のいてしまうこともある。それよりも、何かやることがあり、「会話はついで」くらいがちょうどよい。その「何か」は読書でも、飲食でも、ボランティアの環境保全でもよいだろう。

そもそも私たちが紡ぐつながりは、相手への気持ちのみで維持できるほど強くはなく、定期的に会う機会や口実があるからこそ、続いてゆくのである。交流や会話の他に目的があったほうが、その場に赴く口実をつくりやすくなるし、

■ 図5: 「友だち」の形にしばられず、気軽に「場」へ足を運ぶ



私は、孤独・孤立について専門的に研究しているが、この分野では基本的に孤独や孤立を「悪いもの」と見なす。実際の研究を見ても、孤独や孤立が心身に悪い影響を及ぼし、社会に分断を招きやすいという結果が出ている。しかし、その点を指摘すると、たいてい「ひとりであることの、何が悪いのか」「孤独も悪いことばかりではない」という反論を受ける。たしかに、友だちの輪から離れてひとりになることで、自分自身をじっくり見つめ直したり、それによって新たな気づきを得られたりすることがあるのは間違いない。

重要な点は、「研究者の指摘する孤独・孤立」と「それに反対する人が述べる孤独・孤立」は違うということだ。研究者の多くは、孤独・孤立を測定する際に、かなり厳密な基準を用いる。たとえば、身の回

りに自らを理解してくれる人がおらず、さみしい思いをしている(孤独感が強い)、身の回りに頼れる人が誰もいない(孤立)といった測定方法だ。このように測定した場合、孤独・孤立は心身に悪い影響を及ぼす、社会的に「恵まれない」人ほど孤立しやすいといった結果になる。一方、ひとりであることの重要性を説く人たちの多くは、「社会との接点を保ちつつも、ひとりになることも大事だ」として、「ひとり」の重要性を指摘する。ここでの孤独・孤立は、「何かと確固たるつながりを確保したうえでひとり」と言えるだろう。

このふたつの言説から導かれるのは、「うまくひとりになること」の重要性だ。ここまで論じてきたように、「友だち」という枠組みに囚われすぎてしまうと、うまくひとりになることができない。孤立を恐れて「みんな」にすり

日常でのつき合いが何となくしんどいというケースでも、そういう場をひとつもっていることで、気分は楽になる。

現代は、特定の場よりもむしろ、特定の人と強いつながりを結ぶようになってきている。「友だち」はまさにその典型と言える。そのようなつながりにしばられず、もっと気軽に「場」に足を運びつつ緩やかに人とつながることが重要だ(図5)。

そのような場を社会に用意し、それぞれの好みの距離感で人と接してゆく。友だちになりたいた人はそうなればよい。仮に居合わせた人と友だちにならなくとも、場がある程度の共同性は担保してくれる。社交や交流を意識せずとも居続けられ、友だちができるときもあれば、できないときもある。つながりへの不安が拡大し、相手の気持ちを過剰に気にする社会では、そのような場が必要である。

近年、孤独・孤立問題を検討する行政やNPO界隈では「居場所ブーム」と言ってもよいほど、居場所の必要性が喧伝されている。行く場所もつき合う人も選ぶことができる現代社会だからこそ、そこにどまることのできる場が求められているのだろう。

7 最後に——「うまくひとりになること」の重要性

最後に、ここまでの内容を少し視点を変えて考えてみたい。

寄ったり、「みんな」ということに疲れてつながりを否定したりするからだ。

逆説的ではあるが、うまくひとりになるには、その周りの「何か」とつながっておく必要がある。「何か」との確固たるつながりがあるからこそ、怖がることもなく、ひとりにもなることができるのだ。そのつながりは、家族や友だちとは限らないし、ここで言う「場」というのも、よりどころのひとつになる。

コミュニケーションの技法や心理に関する言説を目にすることが多くなっているが、それとこたわるよりも、もう少し気軽に人とつき合ってもよいのではないか——今の若い人を見てみると、そんなことを感じる。

石田光規 (いしだ みつひのり)
1973年神奈川県生まれ。早稲田大学文学部教授。東京都立大学大学院社会科学部専攻博士課程単位取得退学。博士(社会学)。著書に『友人の社会史』(晃洋書房)、『孤立の社会学』(つながりづくりの隘路)以上、勁草書房)など多数。近著に『友だちがしんどいなくなる本』(講談社)、『人それぞれ』(ちくまブリーチ)、『友だち』(自由になる) (光文社新書)などがある。

北欧のリビングラボ

——当事者を巻き込む、未来づくりの場とは

安岡美佳

「北欧研究所代表」
Yasuko Mika

北欧では1970年代以降、政府・企業・市民などの利害関係者を巻き込み、コミュニティの課題解決に取り組む「参加型デザイン」が実践されている。近年では参加型のオープンイノベーションのための場として「リビングラボ」が広がっており、日本でも設置する企業や自治体が増えてきている。

この新しい手法について、北欧に在住し、リビングラボの研究と実践にあたっている安岡美佳氏に解説をいただく。

1 リビングラボとは

近年、日本において「リビングラボ」が注目されている。中央省庁のレポートに紹介され、企業や自治体の取り組みも増えている。そもそもリビングラボとは何か。そして、なぜ今注目されているのだろうか。初めてこの言葉を聞く方もそれなりにいらっしやるという想定のもと、ラボが盛んな北欧に在住し、リビングラボを研究している筆者の視点で、まずリビングラボとは何かを解説し、海外および日本での事例、そしてリビングラボ実践の手引きと今後の期待される展開について記していく。

リビングラボとは、「Living（暮らし）」と

ら、長期的な視点でサービスや技術、社会の仕組みといったモノやコトを模索し、みんなで社会を創っていく場でありアプローチが、リビングラボなのである。

② マルチ・ステークホルダー

リビングラボは、多様なステーク（利害）を持った人たちが集い、課題解決に取り組むための方法論である。社会では、産業・公共・研究者・市民（産官学民）といった人たちが集う。こうした多様な人たちの意見を調整することは面倒なことだ。しかしながら、多様性を受け入れ、ボトムアップで取り組むことは、当事者意識を醸成し「*1、2」、遠回りに見えたとしても社会を変え、未来を創るおそらくもつとも理にかなった方法なのである。社会を構成する大多数の人々のマインドセットの転換を引き起こすには、トップダウンだけでは限界があるだろう。ただ、集まる人たちは誰でも良いわけではなく多様な視点を包括する必要がある。何を、何を「当事者」は絶対欠かせない。今まで、課題に直面しているはずの当事者は、どちらかというと見過ごされる傾向にあった。高齢者向けのサービス構築に、高齢者が意見を言う機会は少なく、移民支援ツールの構築に移民が加わることは珍しい。リビングラボは、そのような社会で排除されがちな当事者に舵取りを任せ、参加する枠組みを提供する。

「Lab（実験室）」を組み合わせた造語で、「生活者視点に立った新しいサービスや商品を生み出す場所」、「オープンイノベーションをユーザーや市民が生活する場で行う共創活動やその活動拠点」などの意味合いで使われることが多い。現在、誰もが合意するリビングラボの定義というものは無いが、筆者は、「北欧の参加型デザイン手法の一つであり、長期的な視点に立つて実生活の環境で行う、トライアルアンドエラー（挑戦と失敗）のイノベーション手法であり場である」と説明している。高齢者対策・ヘルスケア分野・まちづくり・地域産業の育成・移民対策などあらゆる社会課題に対し、当事者がその解決に向けてのデザインに関わり、デザイナーやそのほか関連各所が一緒になって、適切な

「Lab（実験室）」を組み合わせた造語で、「生活者視点に立った新しいサービスや商品を生み出す場所」、「オープンイノベーションをユーザーや市民が生活する場で行う共創活動やその活動拠点」などの意味合いで使われることが多い。現在、誰もが合意するリビングラボの定義というものは無いが、筆者は、「北欧の参加型デザイン手法の一つであり、長期的な視点に立つて実生活の環境で行う、トライアルアンドエラー（挑戦と失敗）のイノベーション手法であり場である」と説明している。高齢者対策・ヘルスケア分野・まちづくり・地域産業の育成・移民対策などあらゆる社会課題に対し、当事者がその解決に向けてのデザインに関わり、デザイナーやそのほか関連各所が一緒になって、適切な

③ オープンイノベーション

「多様な人たちと共に創り上げる（共創）」という民主主義的な思想を支援するリビングラボは、オープンイノベーションを支える。近年の研究で、多様性はイノベーションを促進するという視点が注目されていることをご存じだろうか。現代社会において1人が一生のうちに獲得できる知識には限界があり、複雑化する技術・社会・文化・経済の課題に取り組むには、協同作業が不可欠であること「*3」、創造性やイノベーションは、分野、文化の境目で、創造的カオスがもたらされることで誕生すること「*4」などが指摘されてきた。同様の視点を、専修大学の上平崇仁教授も自著「*5」で「潮境」という言葉を使い「ものごとや領域が交わり合う場所には、異なる人々が乗り入れることでそこに価値が生まれ連鎖的な出来事が起こる」と述べている。つまり、多くの魚は潮目に集まり、多くのひらめきは分野の境目で起こるのである。分野や文化的背景の違う者たちが集い協同作業を行うことは、語彙、ものの見方、規則、手順、常識の違いなどから、意思の疎通を図るのが困難で衝突は避けられないが「*6」、困難は予想されてもイノベーションの源泉となり得る。リビングラボは、多くの多様な人たちと共有できる価値を模索しながら未来を創っていく民主的な場であり、アプローチである。リビングラボは、主体的なやってみようという想いや意志を持つている人は誰もがアイデアを試してみるこ

サービスや製品を構築していく仕組みづくりを志向するものである。なかでも重要と考える視点は、①実生活の場、②マルチ・ステークホルダー、③オープンイノベーションの3つである。

① 実生活の場

リビングラボは、実生活の場で行われる。実生活の場とは、人々が日常生活を営む場所である自分の家や近所、職場などである。リビングラボが実生活の場を重視するのには理由がある。人は社会的コンテキスト（文脈、背景）によって捉え方や行動が変化するからだ。実際の生活の場で発生しうる計算が困難かつ複雑なインタラクション（相互作用）や変化を受け入れなが

とができる場所として開かれている。

2 北欧のリビングラボの事例

それでは、実際に筆者が関わっているデンマークのリビングラボ「デモクラシー・ガレージ（Demokrati Garage）」の事例を紹介しよう。

デモクラシー・ガレージは、コペンハーゲン市の自動車修理工場エリアの再開発に伴い、設立されたリビングラボだ。「社会に役立つ場をつくらう」と呼びかけたデモクラシーのアドボカシー「*7」NDO「We Do Democracy」が中心となり、市民を集めて6回のワークショップを実施して議論を重ね、コペンハーゲン市への提案書を提出。民主主義を地域や住民に広め、企業のマインドセットや企業を軸とする経済活動に民主主義の考えを埋め込むことを目的とするリビングラボとして2020年に設置された。修理工場のガレージを活用してつくられたデモクラシー・ガレージの普段の活動は、主にイノベーションセンターとしてスタートアップの支援を行うことだ。デモクラシーを推進するコーポラティブ・オーガニゼーション（Cooperative Organization）を基盤とするスタートアップのオフィスが入り、起業家を支援する弁護士・会計士などが出入りする。だが、ここはそうした人たちが使う場所ではない。市民や政治家やアクティビストや親や子ども、移民やマイノリティなどが集い、みんなで一緒

■図1：デモクラシー・ガレージの入り口の様子



新興住宅群の一角の、古い工場跡を活用した「デモクラシー・ガレージ」。

に民主主義に関わる活動や勉強会、討論会、イベントに頻繁に参加する。デモクラシー・ガレージは、誰もが訪問できるオープンな公共スペースであり、そのメッセージを的確に伝えることで、活発なリビングラボ空間を作り出している。スタートアップが集うオフィススペース、外部組織や地域住民とのワークショップが実施できる広めのミーティングルーム以外にも、コペンハーゲンでもっとも美味しいと評価されるピザを出すカフェが併設されており、特に民主主義に特別のこだわりや興味があっても多くの人を訪れる。民主主義に興味を持っていても、知り合いがいらないなどで二の足を踏むことは多いだろうが、入り口は広く開放的で

ミューズメントパークのゲートイメージさせ、入り口付近の掲示板にはイベント情報が共有され、立て看板には、全ての人を歓迎する旨のメッセージが描かれており、少し覗いてみようか、と思わせる仕掛けで溢れている(図1)。デモクラシー・ガレージは、「民主主義」という形ににくいコンセプトを、コミュニティ、ひいては社会にいか根付かせるかという課題に対し、現代社会に即した民主主義の形を模索するコトづくりのリビングラボである。NPOのポトムアップから発生しているが、地域の自治体や産業、スタートアップ起業家たち、地域住民との共創によって場が運営されている。市民の対話や議論を通じてアイデアが生まれ、そのアイデアをスタートアップ企業や自治体、NPOらが実践してみることで、デモクラシーの実践を進めていくことができる場所、コモンズである。だが、単なる「場所」ではなく、場が生み出す魂が宿る場所、アイデアがスパークする場、そして、「民主主義の実践」という大きな力に惹かれて老若男女が集まるコミュニティであるともいえる。

3 日本のリビングラボの事例

近年、日本にも興味深いリビングラボがたくさん生まれてきている。その中でも、筆者が注目しているリビングラボの一つ、石川県小松市の「未来型図書館リビングラボ」[*8]を紹介

小松市でうまく進められている要因もあると考える。そのポイントを3点挙げたい。

① 自律した市民

元々、住民が地域活動に活発なエリアなのだろうか、歴史的に社会の自治の仕組みが整えられているのかもしれない。「なぜか」は、明確に掘り下げられたわけではないが、リビングラボで重視される当事者意識を持った市民が多い。市民が緩やかなコミュニティをつくり、多くの活動が自治体と密に連携し実施されている。そしてその活動は、公民館や祭りや学区や図書館

を軸に、リビングラボ的な学びと実験と実践を展開している。たとえば、市に寄贈された書籍コレクションを元に記念図書館が設置され、その寄贈本に喜んだ市民たちが保存会をつくった。そして、公共図書館の司書と市民の集まりである保存会が協力し、イベントや外部講師を招聘した勉強会を実施している。

② 明確なビジョン

2021年に宮橋市長が公約として「未来型図書館」というビジョンを掲げた。そのビジョンに基づいた3ヶ年施策がつけられ、調査、分析、実施が堅実に実施され、3年間で確実に実績を積み上げてきた。調査や研究(拡散思考、ブレスト)という当たり前のことを堅実に実施し、その結果を報告書にまとめる、調査して良いと思った試みを、次々に展開するなど次の実践に繋げている。市民にわかりやすく可視化して報告し、関心を持った市民が活動に参加するという好循環も見られる。

③ 想いと参加

想いを持った人が動き、具現化できる環境が整備されている。まず、市長が、前述のような確固としたビジョンを持っていることで、プロジェクトが機動力を持って前進している。ちなみに、市長が関心を持ってリードしているというダイアログは、リビングラボ(参加型デザイン)を実施する際の基盤である。また、多くの

しよう。

2021年に当選した宮橋勝栄市長が公約として掲げた次世代のまちづくりの核となる新しい図書館建設。トップダウン式ではなく、市民と共に考え、あらゆる世代の声を取り上げながら共創する図書館をつくり上げるものとして、今もプロジェクトが進められている。

リビングラボの手法が取り入れられたのは、2023年。官民連携手法の調査・検討をした結果、青山学院大学で図書館情報学を研究する野末俊比古教授をコーディネーターとして迎え、「未来型図書館を共に創る!こまつリビングラボ」が始動した。同年度には、多様な市民が参加したワークショップを5回開催。図書館の担うべき役割について追求したり、図書館のゾーニングを検討したり、図書館と周辺施設の連携を考えたりと、グループでの対話を通じて自由にアイデアを出し、その実現に向けて何を行うべきかを検討した。ちなみに、筆者もこちらのリビングラボに途中から関わることになり、小松リビングラボをより深く知るようになった(図2)。

2024年、未来型図書館の実現に向けて、新たなプロジェクトが進められている。旧来のトップダウンではなく、市民との共創によって進められるこのプロジェクトは、市長と行政、市民が一体となって進められる新しい公共の形になりうるものである。こうした進め方にリビングラボの手法は適していると言えるが、特に、

行政職員が自律的に考えをまとめ、物おじせず実施する力があり、年次などで制約されないフラットに意見が言える環境がある。なによりも、多くの活動が市民主導で始められており、ワークショップなどでも、忌憚ない意見が次々に飛び交うなど、参加者が、場に心理的安全性を感じコミットしている。

4 リビングラボの実践

筆者は、過去15年ほどのリビングラボの研究を通して、日本でも北欧でも、リビングラボを実践する際の障壁やつまづきっかけは、それほど変わらないと考えている。「市民にどう参加してもらおうのか」「どのようにリビングラボを継続させるのか」「活動資金をどうするのか」。悩みの大半は、全世界共通である。そのため、少し早くリビングラボに取り組み模索し知見を蓄積してきた北欧から私たちが学べることは多々ある。

その知見を日本にも届けようと、筆者らは、今まで幾つかの試みをしてきた。その一つが、2017年に行った、リビングラボのマニフェストの作成である。一見とらえどころのないように見えるリビングラボの理解を助けるため、必要な心構えをリストアップしたものだ。リビングラボのマニフェストは、北欧および日本のリビングラボの研究者50名にインタビュー調査を行い抽出した8つの「リビングラボ実施の

■図2：こまつリビングラボのワークショップ



幅広い年代の人々が参加し、未来型図書館の新たな機能やサービスについてアイデアを出し合う。写真提供/小松市

■ 図5: リビングラボを成功に導くコツ

議論のための可視化

Key action—コツ
「問題となっている状況」「思いついたアイデア」「議論している内容」などを、絵、図で表現しながら議論・対話し、可視化する

↓

Results—結果
●多様な参加者が共通認識を持つことができ、コミュニケーションの齟齬がなくなる
●検討の抜け漏れが減り、より網羅的な問題分析やアイデア創出が可能になる

参加のハードルをさげる

Key action—コツ
参加者の誰もが議論に加わりやすくなるような工夫をする
たとえば、議論のテーマに関連する写真をそれぞれ撮影してもらい、写真についてあれこれ話し合う(発言のとっかかりをつくる)
ほかに「ルールを単純化する」「中立なファシリテーターを用意する」など

↓

Results—結果
●多様な参加者の多様な意見を吸い上げることができる
●参加者の裾野が広がる
●声の小さい人にも活躍してもらえるようになる

課題の探索やアイデアの検討のために、ユーザー(市民)を含む多様な参加者が対話・議論をするときのコツの例。
参考:「リビングラボの手引き」より要約

この活動を通し、日本国内の様々なリビングラボ実践者の活動を下支えするための「インフラ」を構築することをめざしている。

5 リビングラボの今後の展望

リビングラボは、生活の場でのオープンイノベーションの実践とその場として多くの潜在的な可能性を持つ、今までにない素晴らしい手法・仕組みである。イノベーションを生み出し、社会を変化させる力を秘めている。だからこそリビングラボは、複雑かつ不確実性が高まる現代社会において注目されているのだらうし、個人的にも、今の社会において、リビングラボは注目に値すると思えている。

しかしながら、それは、そもそもリビングラ

ボが万能だからというわけではなく、イノベーションに不可欠な仕組みが内包されているからである。逆に言えば、たとえ「暮らしのなかで実験」したとしても、ただ実験するだけでは、リビングラボの効力を発揮することはできないだろう。一足飛びに、社会課題の解決策や収益をもたらす製品やサービスが生み出される万能の打ち出の小槌のように捉えることは、誤りである。

リビングラボの実践は、とてもシンプルであり、実際、コツを知っている人にとってはそれほど難しくはない。日本には、リビングラボという名前を掲げていなくてもリビングラボ的なものを実践している場はたくさんあり、リビングラボ的な試みをしている方々も増えている。今後、LLLといった場を活用し、リビング

■ 図3: リビングラボのマニフェスト

- 日常生活の一部である**
毎日の生活や社会システムに組み込まれている。そこでは当事者が自分ごととして関わっている。
- 参加者が集まる必然性**
ニーズがあるから集まる。無理やり連れてくるのではない。
- 対話の場**
多様な意見を出し合い、合意点を見つけていく民主的な場。
- トライアルアンドエラー**
ラボなので発想と創造が日常である。ラボとしてうまくいくことがあれば失敗することもあるが、実験場(ラボ)なので、失敗も新しい試みも許容される。
- エビデンススペース**
ラボなのでデータを重視する。データをベースにした分析と改良のサイクルと科学的分析・評価が反復的に繰り返される。
- 長期視点**
単発のワークショップで終わらない。プロジェクト資金が切れても終わらない。仕組みを作り上げ、経済的・組織的に自立する。
- 新陳代謝が見られる**
アンテナ高い系や熱血系リーダーだけではなく、リードする人を支えたり、ちょっと関心があるだけの辺境人が無理なく遠慮なくいられる空間。
- マインドセットの変容**
新しいデータや発見があり、今までの自分の常識が揺らぎ、覆され、日々成長する場である。

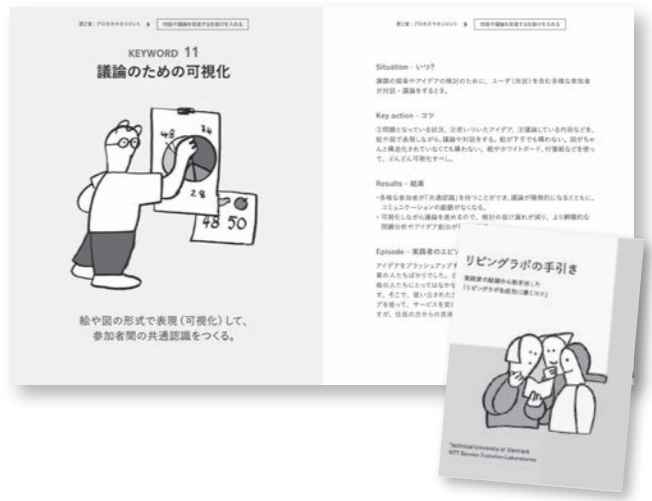
鍵」(図3)である。北欧で機能しているリビングラボを観察・分析してみると、その8つの特徴が自然と育まれる仕組みが埋め込まれていることがわかる。

2018年には、NTT研究所の研究員(当時)との共同研究で「リビングラボの手引き」を作成した。リビングラボの手引きは、日本と北欧のリビングラボの研究者・実践者から集めたノウハウを30個のコツにまとめ、パターンランゲージとして図解したものである(図4)。それぞれのコツは、キーワードやイラスト、エピソードなどで構成されている。たとえば、図5の「議論のための可視化」は、誰もが同じイメージを描けるように、単なる言葉だけの議論に終始しないように、絵や図の形式で表現するというコツである。また、「参加のハードルをさげる」として、対話に不慣れな参加者が議論に入りやすいようなルールを設置するなどのコツもある。そのほかにも、今までの知見を研究者・実践仲間と一緒に書籍にまとめたり、ツールを提案する試みも進行中である。

これら、過去数年の研究で筆者らが模索してきたのは、日本でリビングラボを実施する際の始め方や実施のプロセス、そして成功のポイントであり、それなりの成果をあげることができている。

また、2023年から、産業技術総合研究所の赤坂文弥氏を筆頭に、秋山弘子氏(東京大学)、中谷桃子氏(東京工業大学)、南部隆一氏

■ 図4: リビングラボの手引き



(Adant, Inc.)と私で、プラットフォーム「リビングラボ・ラボラトリー(Living Lab Laboratory Japan,LLI)」[*9]を開始した。LLLでは、既存のリビングラボの理論や考え方、および、これまでの日本での経験や実践を整理・再解釈し、日本の社会的な文脈に合わせたリビングラボのあり方を明らかにすることを目的としている。日本でリビングラボを実践している、もしくは、これから実践するだろう方々が広く参照・活用できるような、リビングラボの理論や手法、ツール、ガイドライン等の構築を進め、創出した成果物(手法やツール、ガイドラインなど)を、誰でもアクセス・利用可能な「 commons」[10]として、公開・発信していく予定だ。

ラボに関心のある研究者・実践者との相互学習の機会等をもっと増やしていきたいと考えている。

注

*1 Mika Yasuka. 2015. Collaboration Across Professional Boundaries - The Emergence of Interpretation Drift and the Collective Creation of Project Jargon. Computer Support Cooperative Work 24, 4 (2015), 253-276. <https://doi.org/10.1007/s10606-015-9292-2>.

*2 『共創デザインを支援する仕組み』リビングラボ「デザイン学 研究特集号」26-2.No.100.26-33。(安岡美佳、2019年)。

*3 G. Fischer. 2000. Symmetry of Ignorance, social creativity, and meta-design. Knowledge Based Systems (2000). [https://doi.org/10.1016/S0950-7051\(00\)00065-4](https://doi.org/10.1016/S0950-7051(00)00065-4).

*4 Charles Percy Snow. 1993. The Two Cultures. Cambridge University Press.

*5 『コ・デザイン—デザインするコトをみんなの手に』(上平崇) 2020年、NTT出版。

*6 Richard Nisbett. 2004. The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently...and Why. Free Press.

*7 アドボカシーとは、社会的な課題の解決をめざし、政府や社会に主体的に働きかけることを目的とした活動を意味する。政策提言のほか、意識啓蒙、世論喚起などを行う。

*8 小松市。「未来型図書館を共に創る—こまつリビングラボ」。 <https://www.city.komatsu.lg.jp/soshiki/1009/shimintotoni/livinglab/16884.html>.

*9 Fumiyu Akasaka, Mika Yasuka, Hiroko Akiyama, Momoko Nakatani, and Ryuichi Nambu. 2023. Living Lab Laboratory Japan. <https://livinglablaboratory.com>.

安岡美佳(やすおか・みか)
北欧研究所代表。東京都出身。専門は、社会で使われるICTとそのデザイン。近年は電子政府、フィンテック、イノベーションのためのICT手法(リビングラボ)に注力する。京都大学大学院情報学研究所修士、東京大学工学系先端学際工学専攻を経て、2009年にコペンハーゲンIT大学博士取得。コペンハーゲンIT大学システムアントプロフェッサー、デンマーク工科大学リサーチアソシエーツを経て2020年ロスキレ大学准教授。デンマークと日本の2拠点で、研究活動を行う。国際大学GLOCOMおよび橋大学客員研究員JETROハンサルタン。

これからの場づくりを 考えるための10冊

集まった人びとが新たな関係性を築き、さまざまなプロジェクトが生まれていく。
そうした豊かな場をデザインしていく必要があるのではないのでしょうか。
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。



6 『コ・デザイン』 ——デザインすることをみんなの手に』

コ・デザインとは、デザイナーや専門家など限られた人だけでなく、利用者や利害関係者をプロジェクトに積極的に巻き込みながら協働でデザインする取り組みを指す。本書では、なぜ協働が必要なのか、各国の事例をあげながら丁寧に解説。「デザインすることは、実は見えない権力をめぐる政治的な問題」でもあるという言葉が印象に残る。

上平崇仁=著
NTT出版／2020年



7 『政治学者、PTA会長になる』

「街場の民主主義」を唱える政治学者が、身近な自治の場であるPTAの会長となった3年間を記した一冊。本来ボランティアであるはずの活動に、なぜ母親たちが苦しめられなければならないのか。そんな義憤にかられ、改革派としてPTAのスリム化に奮闘する日々が、軽妙な語り口で綴られる。いくつかの挫折を経て、「正論」から「寄り添い」に転じていく、著者自身の変化もおもしろい。

岡田憲治=著
毎日新聞出版／2022年



8 『孤独と居場所の社会学』 ——なんでもない“わたし”で生きるには』

安定的な人間関係を築きにくい現代、若者は形から「友だち」になろうとする。石田氏(26頁)の指摘は、社会における「場」の欠如とも関わるものだ。本書は、学校や家族など従来の「場」が変質し「存在証明」を見つけるよう迫られるなかで、誰もが実存的な「居場所」を育てるための身近な方法があることを、多様な視点から教えてくれる。

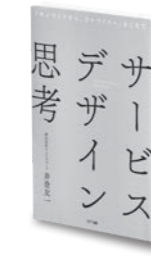
阿比留久美=著
大和書房／2022年



9 『サービスデザイン思考』 ——「モノづくりから、コトづくりへ」をこえて』

サービスデザインとは、「顧客が自覚していないレベルのニーズや欲求に対して、共創関係のもと価値を提案し、持続的な関係を継続できる仕組みを持った製品・サービスを創りだすこと」とし、その具体的な方法論を展開。顧客の心の声を引き出すリサーチ手法、ペルソナづくり方など、すぐにビジネスに活用できるメソッドも紹介している。

井登友一=著
NTT出版／2022年



10 『社会的共通資本』

日本を代表する経済学者、宇沢弘文が提唱した「社会的共通資本」。森や川といった自然環境や道路や電気などの社会インフラ、文化や医療をはじめとした制度資本を、人びとの生活基盤を支える共有財産と捉え、それらの維持管理が社会の豊かさにつながる。本書で展開したこの理論は多くの領域に影響を与え、佐々木氏(20頁)の文化的commonsのガバナンス論の基盤にもなっている。

宇沢弘文=著
岩波書店／2000年



1 『黒板とワイン』 ——もう一つの学び場「三田の家」』

坂倉氏との対談(2頁)で話題となった「芝の家」の原点となる「三田の家」。本書は、その誕生から8年間の活動を、参加した大学教員・学生、商店街関係者などの証言と記録で綴るドキュメント集。大学と地域の交流に始まる「場」の生成と日々の試行錯誤を辿ることで、場づくりの要諦「しつらえ」「きりもり」「くわだて」が実感できる。

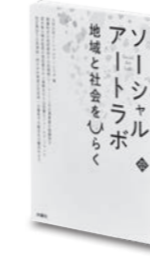
熊倉敬聡、望月良一、長田進ほか=編著
慶應義塾大学出版会／2010年



2 『ソーシャルアートラボ』 ——地域と社会をひらく』

坂倉氏(2頁)が言及した「アーツケープ」。その中心にいた小山田徹氏への取材や各地の事例から、本書は、「場づくり」の核を成す「アート」の役割を考えていく。単なる展示物を超え、地域の持続可能性、人と人、自然との新たな関係性を生む「プロジェクト中心民主主義」の起点として、社会と協働するアートの秘めた力が発見できる一冊だ。

九州大学ソーシャルアートラボ=編
水曜社／2018年



3 『日々の政治』 ——ソーシャルイノベーションをもたらすデザイン文化』

川地氏らの鼎談(8頁)で言及されたマンズイーニ思想、「ライフプロジェクト」による真の民主主義実現へ。本書はその理論と実践を知る“はじめの一歩”。誰もが人生を自ら選択する価値を説き、日々の暮らしと人生のデザインを通じたソーシャルイノベーション実現への道筋を描く。身近な「場づくり」が秘めた可能性に、希望が湧く一冊だ。

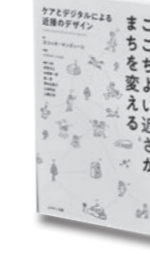
エツィオ・マンズイーニ=著 安西洋之、八重樫文=訳
ビー・エヌ・エヌ新社／2020年



4 『ココちよい近さがまちを変える』 ——ケアとデジタルによる近接のデザイン』

コロナ禍を経て、人類が再認識した「近くにいること」の大切さを起点に、“Livable Proximity(心地よい近さ=近接)”の価値を説くマンズイーニ思想の「現在地」。関係の近接や近接の多様化といった視点から、デジタル技術の援用も踏まえた「ケアする都市」という新たなcommonsの形は、これからの「場づくり」を考える大きなヒントになるはずだ。

エツィオ・マンズイーニ=著 安西洋之ほか=訳・解説
Xデザイン出版／2023年



5 『「地区の家」と「屋根のある広場』 ——イタリア発・公共建築のつくりかた』

互いをケアするためのコミュニティスペース「地区の家」と、地域の知を通じて関係性を育む公共図書館「屋根のある広場」。少子高齢化、格差、孤立といった課題に対応するため、地域の人びとをつなぐための場として機能する新しい公共建築のあり方が示される。本書で紹介される6つの具体的な事例は、“活きた場”を育むための示唆に富む。

小篠隆生・小松尚=共著
鹿島出版会／2018年



Bar SINGLES 06-6366-1131 叶レジャービル2F 8/26(土)19:00~ FISHMANS'Affair ~オレンジ病棟~	Bar THIRD STONE 06-6365-7177 カーサ梅田B2-1 9月 詩について語る会(後)	Bar RAIN DOGS 06-6311-1007 8/22(火)19:30~ 湯才とコント、若手で笑え! 9月 新聞を斜に構えて読む会	Bar ちやうか 06-6361-9169 新谷ビル1F 9/9(土)16:00~ 未発表曲を聴く会
Bar binocle 06-6361-7188 日宝東飯急 レジャービル 2F 8/11(金)19:30~ 自主映画について語る会	Bar BANG 06-6365-1227 日宝東飯急 レジャービル 2F 9月 ピンク映画について語る会	world food 楽園食堂 06-6363-3858 梅田スペースビル B1F 毎日曜12:30~17:00 サルサレコード鑑賞会 &ドミノ大会	cafe restaurant STAFF 06-6361-6191 OMS 1F 別冊を参照



上/「扇町 Talkin' About」のフライヤー。中/淀屋橋 odona での「御堂筋 Talkin' About」開催の様子。下/都市魅力研究室で開催されている「うめきた Talkin' About」。写真提供/筆者 (以下すべて)

2011年には旧大阪市立愛日

御堂筋 Talkin' About

「淀屋橋 odona」内に大阪市が設けたまちづくり情報発信拠点として「御堂筋 Talkin' About」をスタート。近隣の喫茶店主、近代建築ビルのオーナーらとユニットを組み、月1回のペースでサロンを開催した。扇町では文化的な事柄や起業についてのテーマが多かったが、御堂筋では観光魅力・都心居住・水辺・映画・ものづくりなど、「大阪のまちづくり」をテーマとして取り上げ、ゲストをお呼びして話題提供いただき、その後集まった方々全員に喋って

小学校跡地に建つ複合商業施設「淀屋橋 odona」内に大阪市が設けたまちづくり情報発信拠点として「御堂筋 Talkin' About」をスタート。近隣の喫茶店主、近代建築ビルのオーナーらとユニットを組み、月1回のペースでサロンを開催した。扇町では文化的な事柄や起業についてのテーマが多かったが、御堂筋では観光魅力・都心居住・水辺・映画・ものづくりなど、「大阪のまちづくり」をテーマとして取り上げ、ゲストをお呼びして話題提供いただき、その後集まった方々全員に喋って

うめきた Talkin' About

2013年、大阪ガスは「グラフィフロント大阪」開業時に、「都市魅力研究室」という、都市開発やまちづくりの知見を集め、新たなまちづくりのあり方を提案することを目的とした施設を設置した。

同施設の立ち上げ・運営を担当した私は、オープンを機にサロンの拠点をここに移し、「うめきた Talkin' About」と名称を変更して現在まで続けている。テーマはまちづくり・ソーシャルデザイン・地域課題解決などで、ゲストを迎えて30〜40分間話題提供いただき、その後90分間、参加者全員に話していただくという形で進行している。最近では地域で興味深い活動をしている方をゲストに招き、議論を深めるとともに活動自体の情報を発信することを意識している。

『CEL』を振り返る……第5回 「トーキング・カフェ」の拡がり

山納 洋
Yamanoh Hiroshi

“共通の関心を持った人たちが語り合うサロンが近年注目を集めている”
2012年11月発行の『CEL』102号では「トーキング・カフェ」というタイトルで Talkin' Aboutの取り組みを紹介した。それから12年、プロジェクトがどう拡がったかを今回の特集で得た知見とともに、あらためて紹介したい。

私はOMSマネジャーを務めていた2000年に、「扇町 Talkin' About

扇町 Talkin' About

私がかつて「扇町ミュージアムスクエア(OMS)」という、大阪ガス北支社の建物を再活用した小劇場・ミニシアター・雑貨店・カフェレストラン・ギャラリーを備えた複合文化施設のマネジャーをしていた。施設の運営を通じて「場づくり」に関心を持つようになり、その後個人的にカフェや、カフェ的な交流の場のプロデュースを行ってきた。2012年の『CEL』102号では、学びの場、出会いの場、気づきの場としての「トーキング・カフェ」の拡がりについてレポートしている。2023年にエネルギー・文化研究所(CEL)の研究員になってからは、場づくりを持続可能な地域づくりにつなげるための方法論を研究しており、ここではこれまでの取り組みの全体像と、今回の特集をまとめるなかで得られた知見を紹介したい。



「トーキング・カフェ」の拡がりについてのレポートが掲載された『CEL』102号。



上/日替わりマスター制でさまざまな試みが行われた「Common Bar SINGLES」。下/演劇、音楽、アートを中心とした実験のための場として親しまれた「common cafe」。

Common Bar SINGLES

2001年には、「Common Bar SINGLES」という日替わりマスター制のバーの運営に関わった。扇町「Talkn' About」の会場でもあった「Bar SINGLES」の閉店に際し、その空間を残すために「日替わりマスター」という仕組みを考え出し、月に1回マスターになってくれる人たちを募って立ち上げている。場所は大阪市北区堂山町。雑居ビルの2階の、カウンターのみ12席のこぢんまりした

空間だった。

マスターを務めてくれたのは、ライブハウスのブックキングマネージャー、映画館支配人、フリーペーパー編集者、美術家、写真家、学生など、さまざまなバックグラウンドを持った方々だった。通常のバー営業だけでなく、イラストレーターが作品を展示したり、サラーマンが一晩中レコードをかけていたり、ラテン系の人たちが集まったり、演劇関係者が集まったり、十数人だけお客さんを入れてライブを開催したりと、多様で小さな実験の場としても活用され

ていた。私自身が運営に関わったのは2004年までだったが、その後も代替わりを重ねつつ19年間継続し、最終的には2020年のコロナ禍で閉店となっている。

common cafe

2004年には、大阪市北区中崎町で日替わり店主制カフェ「common cafe」を始めている。場所はビルの地下1階にあり、広さは約20坪で、通常営業で24名、音楽ライブや演劇公演の場合は50名が集まる空間だった。運営に関わってくれたのは、飲食店開業を目指している人たちが、表現上の実験を重ねたいと考えるアーティストたち。カフェやバーとしての営業を基本としつつ、演劇公演、音楽ライブ、アート作品の展示、一日雑貨店、映像上映会、トークイベント、ワークショップ、料理教室など、幅広い活動の場として活用いただいていた。前年に扇町ミュージアムスクエアが閉館していたことで、ここでは演劇や音楽、アートを中心とした実験のための

談話室マチソワ

2023年10月に、大阪市北区・扇町公園の南側に「扇町ミュージアムキューブ」と名付けられた、3つの劇場と7つのギャラリー・練習室・会議室を備えたシアターコンプレックスがオープンした。同施設は医誠会国際総合病院の建物の1階から3階に設けられており、(株)シアターワークショップという、劇場の設計・コンサル・運営を行う会社が運営を担当している。

扇町ミュージアムキューブの1階には、キッチンを備えたサロン

スペースが設けられている。私は

ここを「談話室マチソワ」という、店主がお客さんに話しかける場として立ち上げた。マチソワではcommon cafeの有志メンバーを中心とした25名が交替で店に立ち、サロンとして運営しつつ演劇や映画のお客さんと話をしたり、講座やワークショップなどを開催したりしながら語らいの場を設けている。マチソワは劇場の中にあるとともに病院の中にもあり、またお店が扇町という多くのクリエイターが事務所を構えている街の一角にあることから、より多様な立場の人たちが集える場にしていき

たいと、日々実践を重ねている。

場づくりをめぐる視野の拡大

『CEL』102号では、ドイツの社会学者ユルゲン・ハーバーマスの著書『公共性の構造転換』（第2版1994年、未来社）の中で、19世紀のヨーロッパにおいて、文化や芸術に関心を持つ市民がコーヒーハウス・サロン・読書会に集い、開かれた雰囲気の中で文芸的な議論を交わし、そこから市民的公共圏（コモンズ）が形成され、やがて政治について公に意見を交わす

場へと変化していったことを指摘していた。昨年始めた談話室マチソワはまさに、劇場という空間の中に人々が語り合う場を作り、そこからコモンズを生み出していくという新たな実験であった。

今回の特集「場づくりのその先へ——つながりから社会を変えていく」の取材を通じ、私自身も視野を大きく拡げることができた。佐々木秀彦氏は『文化的コモンズ』（2024年、みすず書房）の中で、全国にあまたある博物館、図書館、公民館、劇場・音楽堂が、人が集い、つながりを生み出し、そこから何かを生み出す場となる可能性について、多くの事例とともに述べている。イタリアのデザイン研究者、エツイオ・マンズイーニは、デザインする能力は誰にでも備わっていること、自分たちの生活をより望ましいものに変えていく取り組みは、民主主義の実践に他ならないこと、人々が出会い、コラボレートするための「うっわ」を作り、触発を起こすことが、デザイン専門家の役割として求められていると提唱している。コミュニティデザイン実践家である

場を提供すること、カフェ開業を志す人たちが無理なく自分たちのやりたいことを試せる場所であることを目指していた。

common cafeの取り組みは2023年夏まで19年半続き、「談話室マチソワ」の立ち上げに合わせて終了。店舗は店主の一人が引き継ぎ、「ACT cafe」と名前を変え、実験劇場として現在も運営されている。

坂倉香介氏は、小さなプロジェクトを起点に、近接性に基づくケアし合える関係性を生み出した先に、町全体を居場所に変えていくという道筋を示している。そして『あそびの生まれる場所』（2017年、ころから）、『あそびの生まれる時』（2023年、同）の著者・西川正氏は、知らない人と喋る機会を意図的に作ることで、あそびを通じて関係性を編み直すこと、そこから自治の感覚を取り戻すことが、関係性が希薄になり、「お客さま化」が進む現代社会において強く求められていると指摘している。

人々が集い、アートや文化について議論を交わすという営みは、地域の魅力を見出したり、地域課題を意識して行動を始めたたり、コミュニティや公論を形成したりといった可能性を秘めている。それだけでなく、ケアし合える関係を生み出し、地域での暮らしを豊かなものに変えていくことができる。このことを、談話室マチソワでのさらなる実践を通じて、またさまざまなフィールドにおける取り組みをリサーチし続けることで、より深く理解していきたい。



上/2023年オープンのシアターコンプレックス「扇町ミュージアムキューブ」外観。下/「扇町ミュージアムキューブ」1階の「談話室マチソワ」。

安井仲治

日本の写真史にその名を刻んだ大阪の偉大な写真家たち。その写真家が写し出した作品から、大阪の都市の様相を振り返る。第1回は安井仲治の《平野町》。

はたなか・あきひろ 1962年大阪生まれ。民俗学者。編集者として『月刊太陽』のほか、荒木経惟、佐内正史、石川直樹らの写真集を手がける。著書に『天災と日本人』『21世紀の民俗学』『死者の民主主義』『廃仏毀釈』『宮本常一』『関東大震災』ほか、共著に『宮本常一と写真』がある。

変貌する大都市大阪の過渡期を写す

安井仲治（1903～1942）は大阪の明星商業学校（現・明星高等学校）を卒業後、家業の安井洋紙店に勤めながら、大阪市中を拠点に写真を撮り始めた。そして18歳の若さで、当時関西写真壇を牽引していた浪華写真倶楽部に入会する。初期の安井は絵画主義的な技法を用いた写真表現を追求するとともに、スナップショットで都市風景を活写した。

安井が活躍した1920年代から30年代、大阪は「大大阪時代」と呼ばれる変貌、発展の渦中にあった。1925年に市域拡張で東京市（当時）の人口を抜いた大阪市は、人口・面積・工業出荷額で国内第1位となり、世界6位の大都市に躍り出た。1929年に安井が撮った《平野町》はそんな大変貌の時期、過渡期を映し出すものだ。

安井が育った街でもある平野町は船場の北から6番目に位置する町で、江戸時代から明治末頃まで、市内の五大商店街の一つとして賑わい、昭和初期まで「1」の日と「6」の日には夜店が立った。安井の写真には3階建てのモダン建築、火の見櫓と電柱・電線、瓦葺きの小屋や商店らしき建物、徒歩で、あるいは自転車で行き交う人びとが捉えられている。東西に長細い平野町は平野町通が横切り、町の中ほどを御堂筋が交差する。御堂筋は1926年から拡張する工事が行われていたので、まさにその過渡期だった（なお「大阪瓦斯ビルディング」は33年3月に竣工している）。

実験的な作風への変化

安井は1930年代に入ると、ヨーロッパの先端的な写真表現の影響を受けた作品を創り出

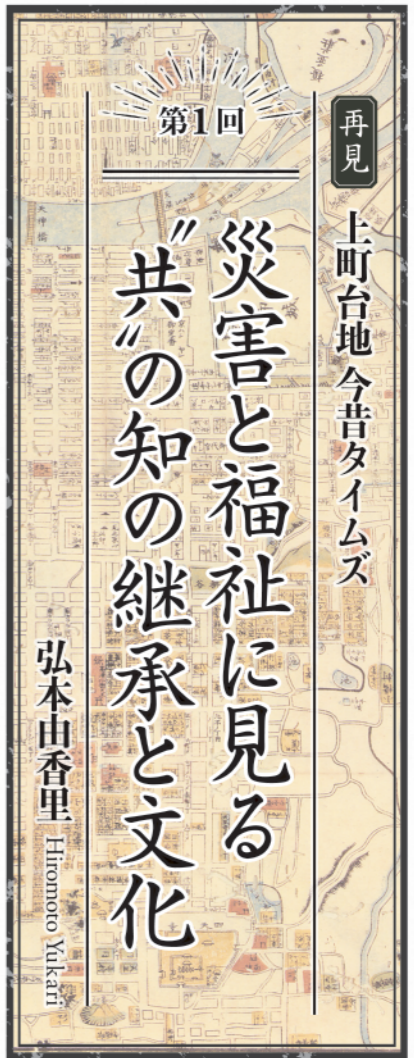
すようになる。《凝視》は1931年に中之島公園で催されたメーデーを撮影した写真に、別の風景を合成した実験的な作品で、端正な構図で都市風景を切り取った《平野町》と比べると、大衆のダイナミズムを斬新な手法で定着しようとする作家の表現意欲を強く感じさせる。安井仲治は大阪の激動に合わせて、作風を大きく変えていったのだ。



安井仲治《凝視》1931年(2010年のニュープリント)
所蔵/兵庫県立美術館



安井仲治《平野町》1929年(2004年のニュープリント) 所蔵/渋谷区立松濤美術館



再見 上町台地今昔タイムズ

災害と福祉に見る 「共」の知の継承と文化

弘本由香里 Hiromoto Yukari

歴史都市・大阪の背骨に当たる上町台地をフィールドに、2013年秋から2024年春にかけて、約10年にわたり20号を編集・発行した『上町台地今昔タイムズ』。過去との対話を通し、現在を見つめ直し、未来へつなぐ歴史実践として、改めて共有したい観点を取り上げてレビューする。

はじめに—過去と現在の終わりのない対話から—

「過去は現在の光に照らされて初めて知覚できるようになる」、現在は過去の光に照らされて初めて十分理解できるようになるのです。「歴史とは、現在と過去のあいだの終わりのない対話なのです」。いずれも、イギリスの歴史家、E・H・カー(1892-1982)による名講義をもとにした著書『歴史とは何か』に記され

ている名言だ。原著が世に出た翌年の1962年には日本語版が出版されている。その後60年を経て、2022年に日本語訳新版が岩波書店から出版され、再びE・H・カーの名言を目にする機会が増えた。今、先が見通せない世界情勢や、異次元の技術革新や環境変動を背景に、長い射程で歴史を捉え、自らの立ち位置や行く先を考えようとする多くの読者層が、同書に関心を寄せている。過去と現在の間

の終わりのない対話は、一部の専門家だけが独占するものではない。混迷する時代にあつて、自らの暮らしと歴史の相互関係を、ポジティブな側面からもネガティブな側面からも不断に問い直す、広い視野や豊かな感受性が一人ひとりに求められている。近年、歴史教育や社会教育をはじめ、まちづくりや文化活動など幅広い話題の中で、しばしば登場する用語の一つに「歴史実践 (doing history)」

という言葉がある。その意味を、広義に積極的に捉えれば、専門性にかかわらず、さまざまな方法で過去との対話を行うことによって、よりよい暮らしや生き方を創造していくプロセスそのものである。筆者は、歴史都市・大阪の始まりの地であり、都心部を南北に貫く上町台地界隈をフィールドに、コミュニティ・デザインに関わる実践研究に取り組んでいるが、その一環で『上町台地今昔タイムズ』

先人たちの歴史実践—二つの文化誌が伝えた災禍—

「わたしたちが暮らす『上町台地』。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。(中略)自然の恵みとリスクのどちらか一方、人との交わり方、次世代への伝え方……。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに(後略)」と、創刊以来紙面に掲げてきた。同紙のストックの中から、歴史実

践として改めて共有したい観点を、本連載でレビューする。上町台地は、古くは海の中に突き出した半島状の陸地で、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である。現在、上町台地の周囲に広がる平野は、かつては海だった。淀川・大和川の河口部に生まれた、無数の洲がそもそも大阪の姿である。水際に向かって拓かれていった大阪のまちは、数々の災害とともに歩んできた。その記録や記憶をいかに共有していくかは、大阪というまちに暮らしてきた人々にとって、どれほど切実で重い課題であったかは想像に難くない。

庶民がちまたの情報をいち早く共有できる瓦版が行き渡った幕末、そして新聞や雑誌が興隆した近代には、災害をめぐる濃密な記録が残されている。社会の激変期に、言論や文化をリードした先人たちは、驚くほどのエネルギーを注いで資料を収集し、記録

を期し、迫真の情報が集められている。あとがきで、緊急特集へのやむにやまれぬ思いが述べられている。「将来への備忘として残るような記録を作って置く必要がある」と考え、これを編んだという。表紙を開くと、各地の被害を伝える生々しい写真の後ろに、安政元年の大地震・大津波の碑と、慶応4年の淀川大洪水の惨状を描いた図も併せて掲載され



を編み、後世へのメッセージを発している。『上町台地今昔タイムズ』Vol.14(図1)では、災害史と文化を、「共」の知という観点から捉え直し、先人たちの実践に学ぶことを試みた。なかでも、今、改めて読み直したい2点を中心に紹介しておきたい。

大阪・船場の葉種商に勤めるかたわら、郷土資料を綿密に収集した南木芳太郎は、上方郷土研究会を創立するともに、昭和戦前期の1931年に月刊誌『郷土研究』上方』を、私財を投じて創刊し、終戦間際の1944年まで、151号を編集・発行したことで知られる。大阪にゆかりの文学、美術、風俗、行事、演芸、信仰等々、第一線の研

究者たちによる優れた論文やエッセー等が多数収録され、大阪の浮世絵師・長谷川貞信らによる木版画の表紙絵は、大阪を中心に上方の折々の風物、記録に留めたい風景を描いて人気を集めた。その中に、ひとときわ異彩を放つ一冊がある。第46号(図2)と表紙絵は二代目貞信の子・小信の作で、大阪・上町台地のランドマークでもある「四天王寺五重塔倒壊の図」。

仁王門が倒壊し負傷した仁王像の背後に、完全に崩れ落ちた五重塔の瓦礫の山が描かれている、衝撃的な光景だ。「上方大風水害号」とある。1934年9月21日に四国から近畿地方一帯を襲った室戸台風の記録的な被害に直面し、急遽10月号に予定していた内容を変更して編まれた緊急特集号だ。近畿各地の被害を伝える新聞記事や写真を採録しているが、驚くべきス

ピードで、要所を押さえ精確を期し、迫真の情報が集められている。あとがきで、緊急特集へのやむにやまれぬ思いが述べられている。「将来への備忘として残るような記録を作って置く必要がある」と考え、これを編んだという。表紙を開くと、各地の被害を伝える生々しい写真の後ろに、安政元年の大地震・大津波の碑と、慶応4年の淀川大洪水の惨状を描いた図も併せて掲載され

図1 『上町台地今昔タイムズ』Vol.14 (2020年春・夏号) 1面。左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。



図2 『上方』第46号(1934年10月号)。9月に猛威を振るった室戸台風による、大阪・近畿各地の被害を伝える『上方大風水害号』として出版。表紙は、長谷川小信筆の木版画「四天王寺五重塔倒壊の図」を採用。右の口絵は惨状の写真。



図3 1923年の『女性』11月号では、9月1日に起きた関東大震災を受け、緊急特集を編んだ。平塚明子(らいてう)や与謝野晶子、高村光太郎ほか錚々たる面々の論説や提言が並び、谷崎潤一郎も作品を寄せた。

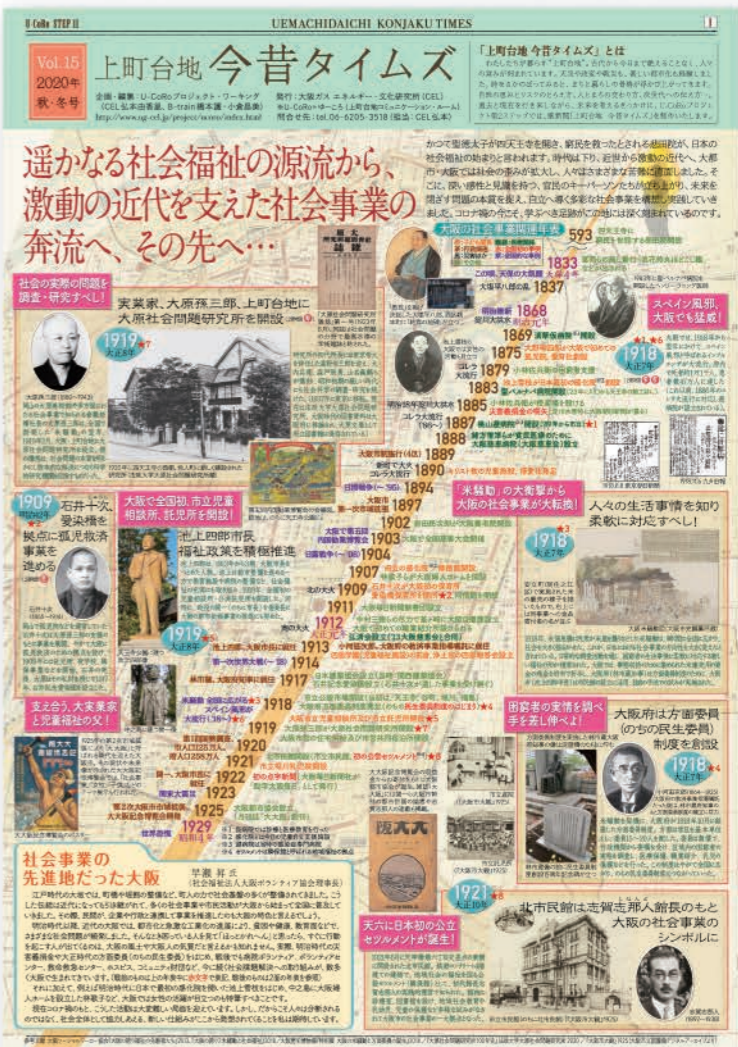


図4 『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15 (2020年秋・冬号) 1面。左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。

ている。失われゆく文化の記録に心血を注いだ、南木による痛切な歴史実践であり「忘れるな、想い起こせ」との声が聞こえてくるようだ。

関東大震災の復興へ
大阪発『女性』誌の言論特集

『上方』の誕生に先立ち、大正時代に化粧品会社の中山太陽堂(現・クラブコスメチックス)がスポンサーとなって設立し、

大正モダニズムに大きな影響を及ぼした出版社があった。プラトン社といい、創始の地は大阪・上町台地。新時代の文化の担い手たる女性読者層をターゲットとした文芸誌『女性』を、1922年に創刊。翌年には『苦楽』を創刊。表紙画やタイトルロゴ、扉絵やカットに、気鋭のクリエイター、山六郎や山名文夫らを用いし、アール・デコ調の華麗なデザインで、一世を風靡したことも知られる。

小説や戯曲等と大衆を濃密につなぐ文芸誌の草分け的存在で、『女性』の編集長には劇作家・演出家の小山内薫を迎え、『苦楽』(第1期)の編集には小説家・劇作家の直木三十五や川口松太郎らが携わった。直木は、1923年9月1日の関東大震災を機に、プラトン社に職を得て大阪に

戻ってきたところだった。両誌の執筆陣には、大衆小説の先駆けとなった気鋭の書き手たちが名を連ねている。

関東大震災時、大阪は多くの被災者の職住や表現の受け皿ともなった。プラトン社は、関東大震災からの復興を視野に、言論のプラットフォームの役割も自覚し実行している。『女性』の11月号で緊急特集が編まれ、被災した関東在住

するところである」と記され、文化の担い手たる自負に目を見張るものがある。(図3)

近代の大阪に生まれた、特筆すべき二つの雑誌が大きな災禍に直面してどのような役割を果たしたかに注目したが、当然ながら災禍と歴史実践はそれだけではない。『上町台地 今昔タイムズ』Vol.14の1面では、古代以来記録に残っている主な災害を年表で列記するとともに、先述の2誌のトピックのほか、近世・近代に瓦版や写真が伝えた、津波や風水害の脅威、被災した寺社の再建、犠牲者を悼み教訓を刻む数々の慰霊碑の存在にスポットを当てている。また、同紙の2面では、現在に目を向け、被災文化を耕す地域に根ざした『共』の場づくりの実践取材を紹介している。

『共』の精神の系譜―災禍から社会福祉事業の先進地へ―

郷土研究誌『上方』大風水害号(1934年10月号)の表紙で、崩れ落ちた姿が描かれた四天王寺の五重塔は、多く

の人々の寄進で1940年に再建されたものの、1945年の空襲で焼失。戦後再び大規模な寄進によって1959年にコンクリート造で再建されている。創建以来、火災や地震や風水害や戦争による受難は絶えず、現在の塔は実に8代目に当たるといふ。

古代以来の歴史を持つ都市・大阪は、災禍の集積地でもある。自然災害だけではなく、人口が密集する都市では、感染症も猛威を振るう。人口が急増すれば、社会のひずみも膨らみ、困窮者をはじめ社会的弱者の問題も深刻化する。戦争の標的にもなりやすい。同時に、災禍を乗り越えるための『共』の精神や知が蓄積されてきた歴史もある。

『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15(図4)では、その源流をさかのぼるとともに、激動の近代を支えた社会事業の大きな流れを俯瞰した。かつて聖徳太子が上町台地に四天王寺を開き、窮民を救ったとされる悲田院が、日本の社会福祉の始まりといわれる。時代は下り、町人の都

市として栄えた近世の大坂では、社会基盤の多くが町人たちによって整備され、町人自ら詳細な町定をつくり町の運営に当たり、捨て子の対応まで責任をもって行われていた。こうした風土が、近代の急激な都市化をもたらした、貧困や労働問題、衛生や健康問題、教育問題など、噴出した都市問題を受け止める土壌ともなった。いわば、近代における社会福祉事業の苗床・実験場として、数々の先駆的取り組みを生んでいった。

『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15の1面では、地域を越えた視野で1918年のスペイン風邪の猛威や、同年に全国に広がった「米騒動」[*2]の衝撃から、大阪では困窮者の生活事情に柔軟に対応するため、調査に基づく新しい福祉の形を模索して、官民が連携した社会事業の大転換が行われていったことに注目。例として、同年(1918年、大阪府が創設した方面委員(のちの民生委員)制度や、翌年(1919年)全国初となった大阪市立児童相談所と

筆者が取り組んできた、ささやかな歴史実践の一つである『上町台地 今昔タイムズ』を題材として、今回は災害と福祉を切り口に、注目すべき観点を紹介した。過去と現在の間の対話は、決して歴史に絶対的な意味づけをするためのものではない。むしろ不断に見つめ直し問い直し、未来

託児所の開設。この年、実業家・大原孫三郎が、社会問題の本質的な解決を目指す科学的な研究機関として、大原社会問題研究所を上町台地に開設した。さらに、1921年、大阪市による日本初の公設セトルメント(隣保館)として、地域の社会教育や診療、乳幼児・児童の保護、就労支援や生活相談など、社会事業の一大拠点となった北市民館が、台地の北方、天神橋筋六丁目に開設されたことなどを挙げた。同紙の2面では、これらのDNAを受け継ぐ拠点の集積や次世代を育む実践を紹介している。

『上町台地 今昔タイムズ』Vol.15の1面では、地域を越えた視野で1918年のスペイン風邪の猛威や、同年に全国に広がった「米騒動」[*2]の衝撃から、大阪では困窮者の生活事情に柔軟に対応するため、調査に基づく新しい福祉の形を模索して、官民が連携した社会事業の大転換が行われていったことに注目。例として、同年(1918年、大阪府が創設した方面委員(のちの民生委員)制度や、翌年(1919年)全国初となった大阪市立児童相談所と

おわりに―『共』の知を継承していくために―

筆者が取り組んできた、ささやかな歴史実践の一つである『上町台地 今昔タイムズ』を題材として、今回は災害と福祉を切り口に、注目すべき観点を紹介した。過去と現在の間の対話は、決して歴史に絶対的な意味づけをするためのものではない。むしろ不断に見つめ直し問い直し、未来

の学者や実務家や文化人をはじめ、多分野の論客たち男女に対する民間からの要求」は、芸術、建築、教育、思想等に及ぶ提案で、永井荷風、高村光太郎、与謝野晶子、伊藤忠太らも加わっている。また、平塚明子(らいてう)ら女性識者による「大震災から得た教訓と生活革命の叫び」は、編集後記に「窃に本誌の誇りと

を切り拓いていく動的なプロセスでなければならぬ。近代に花開いた文芸や言論は、やがて戦時体制に入って規制や弾圧の対象となり、場合によっては利用され、相互扶助の仕組みが戦時体制の相互監視や総動員の基盤にされてしまった負の側面があることも、忘れてはいけない。長い時間軸で『知』を捉え、終わらなき対話が続ける、歴史実践の重要性がそこにある。

注 *1 『上町台地 今昔タイムズ』のバックナンバーは、大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所のホームページで公開している。https://www.og-ec.jp/project/ucor/evn2_konhml *2 1918年、第一次世界大戦による米の価格急騰が引き起こした社会不安が瞬時に全国に広がり、都市部では暴動に発展した。

ひろもと ゆかり 大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。住宅建築専門誌『新住宅』編集員等を経て、1992年から大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)研究員、『上町台地 今昔タイムズ』の発行をはじめ、生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』『地域を活かすつながりのデザイン―大阪・上町台地の現場から』(ともし創元社)など。

豊かな発想を育むには

「議論の場」の大切さ

前田章雄
Maeda Akio



大学講義や学会講演等の機会に、エネルギーに関する話題提供を行っている。そうした活動を通して、聴講者の発言から学ぶことも多くある。私の経験をもとに、「議論の場」を活性化する豊かな発想が育まれるポイントについて述べてみたい。

エネルギー講義で心掛けていること

まずは、講義や講演活動での私のスタンスを述べておきたい。カーボンニュートラルの実現にむけた活動を推進しながらも、私たちは今まさに化石燃料に依存した生活を送っている。そこからどのように脱却するのが問われているわけではあるが、一足飛びに新しい生活パターンへ移れるもの

はない。現在の生活を守りながら、いかにスムーズに新しい未来を生み出していけるのか。「今日の安心を守り、未来の日常を創る」

新しい技術や取り組みを議論しながらも、足元の現実も決しておろそかにしてはいけない。そのためにも、エネルギー源の枠にとらわれない多角的な視点で考える必要性があると考えている。

多角的な視点のたとえでは、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」が

有名だ(図1)。地面を這う虫のよ

うに生活者に寄り添った視点が、発想の原点になればならない。エネルギーが現実の世界で、どのような使われ方をしているのか。どのような課題をもっているのか。利用者の視点となる「虫の目」は必須だ。もちろん、虫にはアリもいればキリギリスもいて、多様な立場の人々が存在している。家庭用だけでなく業務用や産業用など、エネルギーの利用用途は幅広い。一方で、上空から全体を俯瞰する鳥のような高い視座がなければ、偏った意見に陥る可能性が生じるだろう。世界の情勢や経済とエネルギーを関連づけて考える必要がある。

最後に、まっすぐ前を向いて泳ぐ魚のように、過去から現在、そして未来を一本の線で見通すことによって得られるブレない考え方や同じ過ちを繰り返さぬような歴史を学び、歴史から未来を創造する力も必要だ。

こうした「虫の目」「鳥の目」「魚の目」が三位一体となりながら思考をより深めていく活動が何より大切なのではないかと考え、

その一助となるべく、多角的な視点で見た情報発信を心掛けている。

多様な意見が生まれる「議論の場」

さて、講義や講演を行うと、「どうすればカーボンニュートラルが実現するのか、答えが欲しい」といった要求をされることもある。高校までの授業では、正解がすでにある問題を答えてきたが、現実の社会においては、万人に共通する回答など最初から存在していない。単純に答えにたどり着くことはなく、複雑な要素を考慮して検討しなければいけない。

また、どのようなものにもメリットとデメリットが共存しているし、ある人にとってのメリットが別の人にとってのデメリットとなるとは限らない。それぞれが置かれた状況によって、多様なニーズが存在しているからだ。つまり、複数の手法をうまく組み合わせながら、状況に応じて変えるしかない。エネルギーの世界でも同じだ。ひとつの方策だけに頼ることなく、複数の手法を同時に進行させながら、

ら、組み合わせる必要がある。

情報の一側面をうのみにする怖さもある。たとえば、「水素は燃やしても水しか出ないのだから、すべてのエネルギーを水素に転換しよう」とか、「再生可能エネルギーが利用できるのだから、なんでもかんでも電気に変えよう」といった直線的な思考には、注意が必要だ。もちろん、水素利用や電化を否定するつもりはない。一部ではそうした方向にむかうだろうし、そうした方向にむかうべき分野も存在している。しかし、メ

リットとデメリットをキチンと把握しながら思考を巡らせると、向き不向きを考慮した複合的な発想が生まれてくるはずだ。

そこで、複合的な発想を生み出すために、「太陽光発電の欠点を挙げてみよう」というような、あえてマイナス面を討論する場を設定してみた。もちろん、「欠点があるからダメ」ということを言う合うのではなく、「欠点を課題と捉えて克服し、さらに普及させるためにみんなで考えよう」というスタンスの議論である。

この議論を行った場では、それぞれ異なる結果がみられた。たとえば、社会人大学での議論。会社役員や大学教授、自営業など、さまざまな経歴の人が集まっているだけあって、活発な発言が飛び交ったが、みな自分の意見を言うばかりで、まとめてみると常識的な内容に終始する傾向にある。つぎに、同じ会社のメンバーが集まった勉強会の場合。まず、手を挙げる人がほとんど出てこない。指名すると鋭い意見を発言されるので、さすがは現役の社会人だと感心するが、周りの目を気にする

態度や意見が多く、活発な議論になりにくかった。最後に、大学生の議論の場合。ほとんどの学生が「前の人と同じですが」と同じ回答を繰り返され、講義内容をなぞった意見ばかりが見られる。だが、そのなかには鋭い意見を言ってくれる人も現れた。「太陽光発電を普及させると、エネルギー資源を外国から買わなくてもよくなる。しかし、発電効率が低いことを考えると、大量の発電設備を導入しなければならぬ。つまり、鉄や銅やアルミ、そしてレアメタルなどの鉱物資源を大量に海外から購入する必要が生じる」

資源貧困である日本の海外依存に関わる意見は、鋭い慧眼と評したい。

発言した学生に対し、なぜこのような意見をもったのか尋ねてみると、初めからこうした意見をもっていたわけではなかった。ほかの学生たちの発言を聞きながら、考えが膨らんでいった結果だというのだ。専門的な知識や経験が乏しいと思える学生が、他者の発言をもとにユニークな意見を生み出

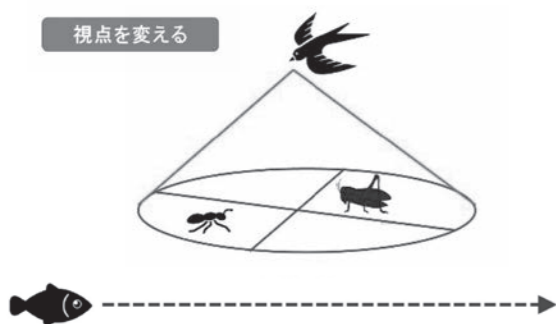
すことができた。これは、多様な意見が生まれる「議論の場」をつくるうえでヒントとなるものである。

「知識(情報)」と「知恵(新たな発想)」

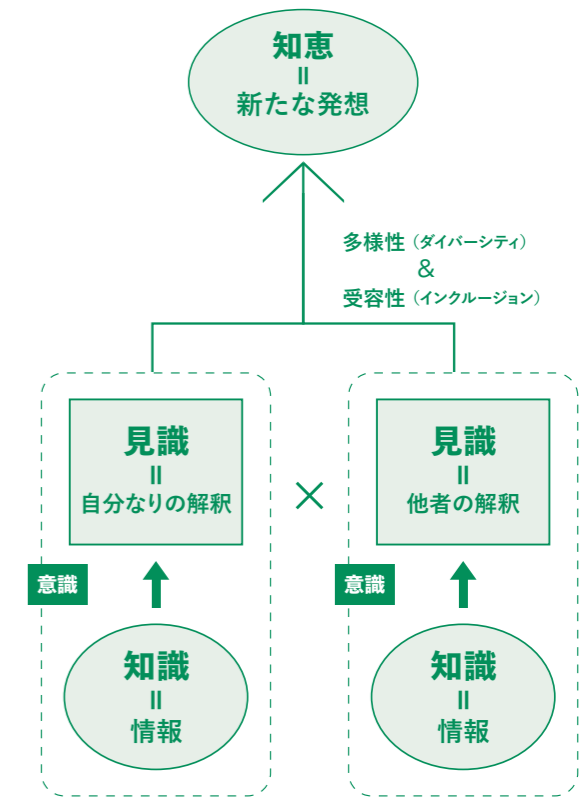
欧米に追いつけ追いこせの時代であれば、専門家の言動や海外の動き、すなわち最先端の「知識(情報)」を有していることが優先された。しかし現代においては、インターネットで検索すれば情報など即座に得られる。最も大事なものは「知恵」、言い換えれば「新たな発想」であるべきだと考える。もちろん、知識がなければ浅かな知恵にしかならず、かといって知識だけが豊富にあっても知恵に結びつくことはない。では、知識と知恵のあいだのミッシングリンクを結ぶものは、いったい何だろうか。

現代社会においては、知識(情報)はそれだけでは意味をあまりもたない(なくてもいいという意味ではない)。知識は、そこからさらに考えて、調べて、思考を重ねて、

■図1:虫の目、鳥の目、魚の目



■ 図2: 知識と知恵の大きな隔たり



という作業を積み重ねることによって、自分なりの解釈を付加させなければならぬ。幅広い「知識」を高い「意識」でもって自分なりの「見識」にまで昇華させてこそ、初めて有益になる。ここでいう「見識」とは、あくまでその人が考えた仮説にしか過ぎない。当然のことながら、専門家の意見もキチンと押さえておく必要がある。しかし、そうした既知の情報だけをみるのではなく、そこからさらに先を自分なりに考えるというプロセスを踏むことが、

より大切だろう。ただ、そこまでしても新たな発想にたどり着けるとは限らない。先の学生がユニークな意見にたどり着いたのは、他の学生の発言を聞き、解釈を膨らませたからにはかならない。つまり、自分の解釈と他者の解釈が接した際、それらのあいだで化学反応が起こり、新たな発想が生み出されたわけだ。知恵とは、このような偶発性で生まれることが多いのではないだろうか。

ダイバーシティ&インクルージョンについての考察
自分なりの解釈と他者の解釈が偶発的に出会い、化学反応を起こした結果、新たな発想が喚起される。この化学反応を生み出す状況を端的に表しているのが、「ダイバーシティ&インクルージョン」ではないだろうか。
ダイバーシティとは、女性の登用と曲解されているケースもあるが、本来の意味はもっと広い。多様性を意味する言葉で、さまざまな観点の属性をもつ多種多様な人材が組織の中に所属している状態を指す。

一方で、多様な意見と接したとしても、それを受け入れる度量と積極性がなければ、何も変わらない。そこで登場するのが、インクルージョンである。インクルージョンとは包含性を意味するが、多様な人材の個々の特性を活かされている状態を指している。
日本社会は元来、同一民族・同一言語の割合が高く、企業組織においては男性優位の形態が長く続いてきた。右肩上がりの成長時代

においては、すでに顕在化している課題に対して単一の解決策を示せばよかった。ここでは、同質化した組織のほうがより早く解に到達できたのかもしれない。別の言い方をすれば、少数意見を切り捨ててきた一面はあるだろう。

しかし、グローバル化がすすみ、情報が即座に世界中を駆け巡る現代社会では、多様性すなわち個人が認められる時代になっている。新たな提案に対して過去の前例や有識者の意見を求める昭和的な古い感覚では、これからの時代を生き抜くことは難しいだろう。イケイケドンドンの成長時代から、ある程度飽和した成熟社会になった現代においては、個人を尊重するとともに、多様な意見から生まれる豊かな発想が求められている。その基本となるのが、ダイバーシティ&インクルージョンである。
ダイバーシティを私なりの言葉で言い換えると、「いろいろな意見を身近におくこと」である。特に大学生など若い人たちは、日常から情報のシャワーを浴びていることから、「議論の場」で貴重な意見を発することも多くある。そ

して、インクルージョンは「いろいろな意見を受け入れること」だ。もちろん、他者の意見を求めるだけでなく、自分自身もまた他者から意見を求められる存在になる必要がある。つまり、ダイバーシティ&インクルージョンの理想的な状態になるには、「いろいろな意見を出す自分になること」が必須だ。

**好奇心のツノを
たくさん持とう！**

では、「いろいろな意見を出す自分」になるにはどうすればよいだろうか。そこにはやはり、「好奇心」が求められる。ベンチャービジネスで成功した人にその成功

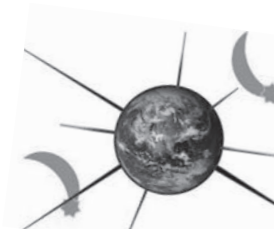
の秘訣を伺った際、「好奇心のツノを育てることだ」と言われたことがある。成功者に共通することは、誰もが好奇心旺盛であり、行動力が誰よりもあるというのは皆さんも了解されることだろう。その好奇心が、チャンスをつかむのだという。
そのイメージをイラスト化したのが図3である。自分自身を地球とし、チャンスは宇宙空間を飛び回る彗星として表した。彗星は地球の周辺を飛び回っているだけで、地球に衝突することはまずない。この彗星がぶつかるのを待つのではなく、自発的に取り込むためのものが、好奇心のツノである。ツノは地球に近づいてきた彗星を絡ませ、自らのもとへと引き寄せる。

元となることは多くあるだろう。私の経験をもとに、多様な意見をもつ人間を育み、豊かな「議論の場」をつくる要因を探ってみたつもりである。今回のレポートがその一助となれば幸いである。

■ 図3: 好奇心のツノ



一般の人



成功した人

また、ここでいうツノは分野を固定しない方が望ましい。「自動車エンジンの開発者が、ダーウィンの進化論に刺激された」ように、越境した分野の話題が化学反応の

エネルギー・文化研究所のホームページで連載しているコラム

エネルギーよもやま話 **連載期間** 2022年4月～2023年10月

歴史に学ぶエネルギー **連載期間** 2023年11月～毎週連載



<https://www.og-cel.jp/column/index.html>

大阪の 胃袋

湯澤規子

Yuzawa Noriko

画＝竹田嘉文

第10回

上方焼鰻まむし語り

—東西鰻考—



日本の鰻さばき

去年の夏、調査で訪れた東南アジアのラオスで食べた鰻料理が日本とはずいぶん違うので驚いた。それは、ぶつ切りにした鰻をカレー粉と唐辛子と香草を入れて煮込み、泥臭さを他の食材で消して食べる一皿であった。

これに対して日本では、鰻を包丁で開いてから串打ちし、蒸し、焼き、タレを付けて香ばしい焦げ目を付ける。泥臭さは幾重にも手間をかけて取り除かれるのである。背割りにしてから蒸して焼くのが江戸、腹開きにして蒸さずに焼くのが大阪という東西の違いもある。武士社会の江戸では「切腹」を嫌って背割りにする、というのは冗談のようにも聞こえるが、あながちそうともいえない。越後(新潟県)の村上で職を失った武士たちが作り始めた「塩引鮭」が、腹を一部切らずに開いて干された歴史などを知らると、魚さばきに人びとの心情と粋なユーモアが宿っていることを感じさせられるからである。

手間をかけてさばくからこそ、余すことなく食べられる。鰻の肝や骨は別にしてから素揚げや肝吸いにして供される。頭は捨ててしまう江戸と違って、大阪では頭を付けたまま蒲焼にし、最後に落とす。これが「半助」と呼ばれて安価で売られていた。豆腐と葉葱と一緒に煮込む「半助豆腐」は、いかにも始末な大阪らしい庶民の料理だ。

まむしは「まぶし」あるいは「まむしし」

大阪では鰻飯のことを「まむし」と呼ぶ。

まむしは、鰻をひと口大に切り、ご飯の間に挟むようにして、上にはタレをかける。ご飯の上に「ど

うだ」と言わんばかりに鰻がのった関東風も良いが、お目当ての宝を掘り出すがごとく、ご飯に埋もれた関西風の鰻もまた何とも言えない魅力がある。なぜ大阪では鰻飯を「まむし」と呼ぶのか。それには諸説あって面白い。

「ご飯に「まぶす(混ぜる)」という意味で、まむしと呼ぶようになったというのが1つ目の説。2つ目は、「まむしし」、つまり「飯で蒸す」という意味である。心齋橋にあった老舗「いづもや」の主人が語るには、「むかし、堺にたいへんうなぎの好きなお金持ちがいた。丁稚に大阪まで行かせて、かば焼を買って帰らせるのだが、冷えてしまうとうどうもいけない。一計を案じて、あついでうなぎの中に入れて持って帰らせると、ほかほかしたうなぎが食べられた」という「*1」。これと似たものに、「飯の「間」で蒸すから、「間蒸し」となった、という説もある。

そうとは知らず、「昼飯に、まむしでもどうや」と言われてぎょっとしたというのは、若かりし頃の父のエピソードである。まむしといえば、まず毒蛇の「蝮」を想像してしまい、「まむしを食べる」という言葉を聞いて、耳を疑う人も少なくないのではないか。たとえ大阪生まれの大阪育ちであっても、値の張るまむしは日常の食事ではないから、誰にとっても馴染みのある言葉とはいえないのかもしれない。大人になって初めてまむしを食べたという父もその一人であった。

旅鰻今昔——出雲と摂津をつなぐ鰻街道

父が「今日はまむしやで」などと言うので、私は子どもの頃からその名に親しんだ。プラスチック製の朱色の丸いお重が一人分ずつ食卓にのせられてい

ると、子ども心にも嬉しいものだった。フタを開けるとひと口大に切った鰻がのっていたが、それは大阪風だったのだと思に至る。私が家で食べていたのは、母が作る庶民的な鰻飯である。

私が子どもだった1970～80年代、スーパーマーケットには、やや高価とはいっても手ごろな値段の鰻が並ぶようになっていた。鰻の蒲焼は水産加工品として1970年代に急速な躍進を遂げた「*2」。その背景には養殖技術が格段に高まり、静岡県をはじめとして日本各地に鰻の産地が形成されたという変化があった。謎に包まれた鰻の生態が研究され、稚魚が台湾や中国から輸入されるようにもなった。最近ではグローバル経済の中で鰻そのものが海を越えて取引される一方、絶滅危惧種に指定されるなど、話題が尽きない。今昔を問わず、胃袋の欲求は功罪を伴いながら万物を動かす原動力となってきたわけである。

それに関わって、江戸時代には鰻の産地をめぐる興味深い話がある。江戸では江戸前鰻の番付表が作られる一方、それ以外、つまり他所から届く鰻を「旅鰻」と呼び、格下と評した。『職人尽絵詞』にも「旅鰻」ではない江戸前鰻を焼いていると宣伝する言葉が記されている「*3」。

ところが、大阪では「旅鰻」が格上と評されていた。老舗「いづもや」の店名が示唆しているように、江戸時代、高級鰻は出雲(島根県)から運ばれてきた。出雲の中海で採れた鰻は約30日間かけて生きたまま天秤棒に吊るした竹筴に入れられ、旅をしたのである。竹筴には中海の海藻のをせ、一里ごとに清流に浸して鰻が死なないように山道を運んだらしい。出雲と備中の国境である四十曲峠を越えて摂津へ、気

の遠くなるような道なのである。それでも海水と淡水が混ざり合う汽水で獲れた鰻は臭味がなく、肉が柔らかくて脂がのっている高級品として重宝された「*4」。

大阪は水の都であったから鰻の生息域もあったに違いなく、地元で獲れる鰻も京橋の川魚商人たちが扱っていたはずである。それでもなお、旅鰻が重宝されるのは、味や歯ごたえへの飽くなきこだわりだろうか。：。どうやら鰻に誘われて、探究の沼に足を踏み入れてしまったようである。実家で処分すると言われて引き取った、あの懐かしい朱色のお重を引っ張り出し、まずはまむしを味わってから、探究の旅へ漕ぎ出すとしようか。

注

- *1 佐藤哲也『カラーボックス143 大阪の味』保育社、1968年、50頁。
- *2 野村信之「関西鰻蒲焼論」『水産養殖』39(2)、1991年、229～231頁。
- *3 青木国夫ほか編『江戸科学古典叢書 39(職人尽絵詞 人倫重宝記)』恒和出版、1982年、69頁(国会図書館デジタルコレクション)より閲覧。
- *4 酒井亮介『雑喉場魚市場史——大阪の生魚流通』成山堂書店、2008年、30～40頁。

ゆざわ・のりこ 法政大学人間環境学部教授。1974年、大阪府八尾市生まれ。3歳で東京、千葉へ転居したが、祖父母や両親の影響を色濃く受けた食環境により「大阪の胃袋」育ちを自負。『7袋のポテトチップス——食べるを語る、胃袋の戦後史』(晶文社)や、『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか——人糞地理学ことばはじめ』(ちくま新書)、『焼き芋とドーナツ——日米シスターフッド交流秘史』(KADOKAWA)、第12回河合雄雄学芸賞受賞)など、食や排泄といった人間の根源的な生命行動から都市文化を論じた話題作を続々発表。

“活きた場”が社会を変えていく

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所
所長 富尾博之 Tomio Hiroyuki

Daigasグループでは、2011年より年1回、グループ従業員の社会貢献マインドの醸成を目的に「ソーシャルデザインフォーラム」を開催している。社会課題解決に取り組む社内外の方々に登壇いただく形で継続してきたが、一昨年は「サードプレイス」を、昨年は「場づくり」をテーマに実施している。この2回では、家とも職場とも違うところに、自分らしく心地よく過ごせる「第三の場所」を持つこと、趣味や社会的活動などを通じて得た知見や人とのつながりを本業に活かしていくことの意義について伝えてきた。コロナ禍により出社が叶わず、家＝職場という状況が長く続いたことから、職場での仕事とともに社会的活動を再起動させることが必要と考えてのことだ。

今回の『CEL』では「場づくりのその先へ」と題し、人々が集まる場はどうマネジメントすれば“活きた場”となるのか、そこで生まれたアイデアやつながりが社会を変えていく原動力となり得るには何が必要なのかを、現場での実践を重ねている方々とともに考えてきた。ここから得た知見は、多くの「場」で活かすことができるであろう。そして安全・安心な環境をつくり、そこで生まれた関係性や着想を大事にすることは、自分自身、ひいては企業の活性化にもつながっていくと考える。

お詫びと訂正
本誌134号(2024年3月1日発行)の8-13頁『「広場」を核にした、歩きたくなるまちづくり——富山「グランドプラザ」はなぜ成功したか』において、下記の通り誤りがございました。ご関係の皆様および読者の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。お詫びして訂正いたします。

- ⑩10頁1段 5行目『「道にして広場、歩くのもくつろぐのも自由」』
→「道にして広場、歩くのもくつろぐのも自由」(『』をトル)
- ⑫11頁1段 8行目「事務局」→「事務所」
- ⑬12頁2段10行目「都市の豊かさ」→「都市生活の豊かさ」
- ⑭12頁2段19行目「今は1週間に」→「開業後は1週間に」
- ⑮13頁1段 7行目「主役となる市町村などの」→「活動の後ろ盾となる市町村などの」

CEL ホームページ
<https://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容や情報誌「CEL」バックナンバーをご覧になれます。

※CELホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。下記の二次元コードで読みとることもできます。



Facebook ページ
<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

note コラム
<https://note.com/ognwcel/>

volume135
September 2024

特集
場づくりのその先へ
——つながりから社会を変えていく

2024(令和6)年9月1日発行

発行
大阪ガスネットワーク(株)
エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人
富尾博之

企画・制作
熊走珠美

特集担当
山納 洋

編集人
日下部行洋(平凡社)

編集
株平凡社

アートディレクション & デザイン
okamoto tsuyoshi +

校正
株アンデパンダン

印刷・製本
株東京印書館

お問い合わせ窓口
大阪ガスビジネスクリエイト(株)
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2024 OSAKA GAS NETWORK CO., LTD.

※禁断転載複製
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスネットワークの見解を示すものではありません。

万博遺産

橋爪節也
Hashizume Setsuya

第11回

“にほふがごとく今盛りなり”
——東大寺七重塔の復元と古河パビリオン

去る4月24日、奈良文化財研究所が発表した天平時代創建の奈良・東大寺七重塔の復元研究を見て、急に半世紀前の万博会場の記憶がよみがえってきた。

未来社会をイメージさせるパビリオンや映像と音響に溢れていたEXPO'70だが、和風でクラシックな外観のパビリオンがあった。一つは竹林に囲まれた松下館であり、もう一つは「古代の夢と現代の夢」をテーマに、高さ八十六メートルの塔の形をした古河パビリオンである。そのモデルとなったのが東大寺に東西二基が建てられた七重塔(現存せず)である。

古河パビリオンは古代日本人が理想のシンボルとして塔に託した“新しい世界”への夢を、現代にも喚起させようとし、外観は歴史的建造物だが、館内には、生活の未来像を反映した「コンピュータピア」という展示室が設けられた。公式長編記録映画『日本万国博』(総監督・谷口吉)には、人の声に反応してコンピュータが制御するロボットアームのアトラクションが映し出されている。また建物の工法も新しく、プレハブの屋根をリフトアップし、上層部から

順に組み立てられ、最上層は回廊式の展望台であった。

古河パビリオンのデザインも万博当時の研究を具現化したものだが、今回、東大寺の委託で最新研究によるあらたな復元案が公表された。万博から五十年後の未来である今年、時間は逆行し、千二百年も隔てた過去が精細に分かつてきたのが面白い。

東大寺七重塔の復元案は一層目の大きさが一辺約十五メートル四方で、高さが約六十八メートルである。古河パビリオンより約十八メートル低い、京都の東寺の五重塔が約五十五メートル、中国・西安の大雁塔が約六十四メートルなので、偉容に変わりはない。六十メートルは現代のマンションで約二十階建てとなり、タワーマンションと呼ばれる物件となる。

古河パビリオンは万博終了後に解体され、東大寺大仏殿の近くに二十三メートルの巨大な相輪が移設された。金色に輝く相輪を見上げるたびに、万葉集に「にほふがごとく今盛りなり」と謳われた平城京と、高度成長期の日本が重なりあい、閑静な奈良を散策しつつも万博の記憶がよみがえる。

◆橋爪節也(はしづめ・せつや)

大阪大学名誉教授。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室学芸員、大阪大学総合学術博物館教授を経て現在、名誉教授。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大坂百景』、『大坂イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。



右/東大寺七重塔を模したEXPO'70の古河パビリオン。
上/展示室「コンピュータピア」の様子。右・上/写真提供/大阪府



奈良文化財研究所が発表した東大寺七重塔の復元案。出典/『東大寺東塔の復元研究』より転載

奈良・東大寺に移設された古河パビリオンの相輪。背景に大仏殿が見える。撮影/橋爪節也



